聖徳学園創立 90 周年記念
第49回　公開研究発表会

2017
6.17

英才教育の追究

知能教育を目指した学習指導
考える力を育てる保育

発 表 会 要 項

聖徳学園小学校
聖 徳 幼 稚 園

教育目標

1　一人ひとりの子どもの個性を育てる
2　知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる
3　豊かな感性と自立心を育てる

お誓い三か条

一、われわれは　未来をひらく戦士となり
　新しい世界を　開拓します
一、われわれは　恥と涙をわきまえて
　光明正大に　行動します
一、われわれは　祖国の伝統を重んじ
　祖国と人類のために　つくします

発 表 会 要 項

主　題　英才教育の追究

◦知能開発を目指した学習指導
◦考える力を育てる保育

○平成 28 年度東京都児童生徒発明くふう展において 29 回目の「学校賞」受賞
○第 33 回植物画コンクールにおいて 4 回目の「特別奨励賞」受賞

平成29年6月17日(土)　9時15分～12時40分

プールあそび

お店屋さんごっこ

幼稚園

運動会

体育あそび

小学校

運動会

スポーツ大会

百人一大会

林間学校

聖徳祭

新入生を迎える会

第49回　公開研究発表会に当たって

～知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育～

聖徳学園小学校長
聖徳幼稚園長　和田知之

「氷が溶けたら何になる？」という問いに対して、「水になる」という答えだけではなく、「春になる」と言った柔軟な発想を大切に育てていきたいという願いで、昭和44年（1969）に、個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を開始しました。以来48年間、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を目指して、

○主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成

○知能開発～創造的知能の開発と育成～

○一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～

を重点にした教育活動を重ねてきました。

●意欲と集中力の育成で知能と学力の向上

我が国では最近、小学生から大学生に至るまで学力低下の問題が話題になっています。その原因として、子どもたち自身の学習意欲と集中力の低下が大きな要因ではないでしょうか。

知能や学力の向上はもとより、子どもたちが将来社会で活躍していく上でも重要な資質は意欲と集中力になるとの考えから、私たちは幼稚園から小学校低学年までは、まず意欲と集中力の育成に重点をおいています。積極的な意欲と集中力のある子どもの場合は、仮に学校での学習時間や内容が少なくなっても、それこそ「1教えたら10学ぼう」とする意欲を発揮して、自分から主体的に学習を進めていくことができ、また習得率も高くなるからです。

入園したばかりの年少児（3歳児）の知能あそびを見ていると、一つの遊びに集中できる時間はせいぜい15分から30分程度です。なかには、教師の説明はほとんど聞

けず、周囲のことが気になり立ち歩くなど、なかなか集中して取り組めない子もいます。それが3学期頃になってくると、ほとんどの子が40分ぐらいは集中が持続出来るようになってきます。年長児（5歳児）になると、与える教材（遊びの内容）さえ適切であれば、60分間の知能あそびの時間が過ぎて昼食の時間になっても、「もっとやりたい!」言って、遊びを継続することもしばしばです。

このように幼稚園時代は、一人ひとりの子どもをよく観察していると、見違えるように意欲と集中力が身についてくることが分かります。この幼児期の3年間の成長は、小学校入学後の3年間の成長の比ではありません。特に、高学年になっても意欲と集中力が十分身についていない子どもの学習指導は、大変苦労が伴います。ですから、私たちは幼稚園と小学校の指導上の連携を深め、3歳児から3年生ぐらいまでは、意欲と集中力の育成、つまり主体的に学ぶ態度を育てることに重点をおいているわけです。

こうした意欲と集中力を育成していくためには、日頃から授業（遊び）研究を深め、授業内容や方法に工夫が必要になることは言うまでもありません。子どもたちが授業（遊び）に意欲的に集中して取り組む条件としては、

○学習（遊び）内容に興味・関心があること

○難易度が適切であること

○学習内容に発展性があること

等が重要な要素になってきます。ですから聖徳では、平素から教材研究と教材・教具の作成にはかなり力を注いでいるのです。こうして低学年の間に、意欲と集中力を育成しておくと、高学年になるにつれて学力もめきめきと向上してきます。

よく聖徳学園小学校の卒業生は、中学や大学への進学実績が高いが、どのような受験指導をしているのかと言ったような質問を受けます。学校では、特別な受験指導をしているわけではありませんが、受験においても意欲と集中力、知能教育の成果は、結果的に大きなプラスになっていることは事実です。このことは、中学受験より大学受験と上級学校になればなるほど、効果を発揮しています。

●創造的知能の開発と育成

意欲と集中力の成果は、学力の向上だけではありません。創造的知能の開発と育成にも大きな成果を発揮してきます。

創造性の教育成果は、評価することはなかなか難しいのですが、一例として発明協会が毎年実施している、「東京都児童生徒発明くふう展」での成果を紹介します。聖徳では、毎年夏休み明けの９月に自由研究展を開催します。これにはほとんど全員の児童が、自分の興味・関心に基づき課題を見つけて、それについてまとめたり、製作したりした作品を出品しています。児童によっては、小学校６年間一貫したテーマで研究を継続して取り組んでいる者もいます。この中から、校内審査を経て「東京都児童生徒発明くふう展」に該当する作品を15点（1校あたり15点までに限定）出品します。その結果、毎年10点くらいの作品が入賞し、これまで29回「学校賞」を受賞しました。そして東京都代表として全国コンクールに出品され、毎年２～３名の作品が入賞しています。

こうした成果を過分に評価していただき、今までに文部科学大臣から７回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞いたしました。このように、創造的知能の開発と育成では成果を挙げてきたように思っています。この創造性の開発と育成の条件を、これまでの実践結果から要約すると概ね次の通りです。

① 創造的態度を育成する
　意欲・集中力・好奇心・根気・いろいろ工夫する態度等
② 個性を啓発して伸長する
③ 創造的知能を刺激し育成する
④ 直観力（直観的思考・ひらめき）を育成する
⑤ 個性と創造性を認め合える学校環境を整える

等です。本日の授業の様子から、少しでも汲み取っていただければと思います。

●個性と能力差に対応した複数指導（担任）制

子どもの個性や能力･発達段階は、一人ひとり異なることは言うまでもありません。これに対して一人ひとりにきめ細かな指導をしていくためには、まず少人数による学級編成が必要になってきます。少人数といっても、学校では子ども同士が学び合い、刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく側面も大きいので、あまり１学級の人数を少なくすることには教育効果の上で感心しません。また、小集団でなければ、自分の力を発揮できないような子どもに育てても困るのです。

そこで聖徳では、昭和54年度から1学級の人数は30名にして、個人差が顕著な知能訓練や数学の授業において、2人担任制を試みました。これは一つの教室に2人の担任が入って授業を進めるわけですから、2人の担任の綿密な連携が前提になりますが、個別学習に重点をおく知能訓練や数学の授業では、かなり効果を発揮することが明確になってきました。

現在、複数指導（担任）制を実施しているのは、

幼稚園では、学級担任　カリキュラムあそび

小学校では、学級担任　知能訓練　ゲーム　工作　数学（1～3年生）です。

また、学年が進むにつれて能力差は段々広がってきますので、数学と知能訓練では3年生から、そして国語と英語は5年生から能力（習熟度）別にクラス編成して授業を進めております。そのために、一人ひとりの子どもがゆとりを持って授業に取り組み、各自の能力の限界に挑戦することが可能になります。

本学園では複数指導（担任）制のねらいを、

① できるだけ多く（複数）の教師の眼で一人ひとりの子どもを指導する

② 一人ひとりの子どもの個性と能力差に対応したきめ細かな指導をする

この2点においています。本日の授業を通して、複数指導（担任）制の利点を見ていただけたらと思います。

以上の通り、聖徳の教育の基本的な考え方と本日の公開授業（保育）の視点を簡単にまとめておきました。私たちの趣旨を少しでもご理解戴ければ幸いです。

また、本日の授業（保育）内容につきましては、「懇談会」において、意見交換していきたいと思います。どうぞお気軽にご出席ください。このところ学校教育のあり方について関心を集めておりますが、21世紀を生きる子どもたちの健全な成長を求めて、皆さん方と共に理想的な授業のあり方を追究していきたいと考えております。本日は、ご参会戴き誠にありがとうございました。

目　次

第49回　公開研究発表会に当たって …… 5
発表会要項（時程表） …… 11
会場案内図…… 14

幼稚園の指導案

◇　**公開保育〈9：15～10：00〉**

本日の保育について …… 17
3歳児（ほし組）「クラス活動（知能あそび）」…… 18
3歳児（はな組）「クラス活動（造形あそび）」…… 21
4歳児（そら組）「リトミックあそび」…… 23
4歳児（もり組）「知能あそび」…… 25
5歳児（つき・やま組）「体育あそび」…… 29
5歳児（つき・やま組）「造形あそび」…… 31

小学校の指導案

◇　**公開授業〈9：20～10：20〉**

1年生（あさぎり組）「ゲーム・工作」…… 35
1年生（しらさぎ組）「数学」…… 37
2年生（あさま組）「国語」…… 39
2年生（ほくと組）「理科」…… 42
3年生（はやて組）「知能訓練」…… 44
3年生（のぞみ組）「知能訓練」…… 48
4年生（くろしお組）「国語」…… 52
4年生（はやぶさ組）「地理」…… 55
5年生（はまかぜ組）「リーダーインミー」…… 57
5年生（わかしお組）「英語」…… 59
6年生（あずさ組）「理科」…… 63
6年生（やくも組）「歴史」…… 66

全体会〈10：30～11：45〉

あいさつ「英才教育の成果発表」…… 71

園児・児童発表　5歳児　歌　唱

4年生　合　唱

研究発表　「本校の自由研究にみられる児童の個性・創造性」

平成29年度の研究活動計画

研究部の活動計画 …… 75

知能教育研究部の活動計画 …… 77

国語科研究部の活動計画 …… 78

数学科研究部の活動計画 …… 79

英語科研究部の活動計画 …… 80

理科研究部の活動計画 …… 81

地理科研究部の活動計画 …… 82

歴史科研究部の活動計画 …… 83

体育科研究部の活動計画 …… 84

音楽科研究部の活動計画 …… 85

美術科研究部の活動計画 …… 86

家庭科研究部の活動計画 …… 87

研究発表会のあゆみ…… 88

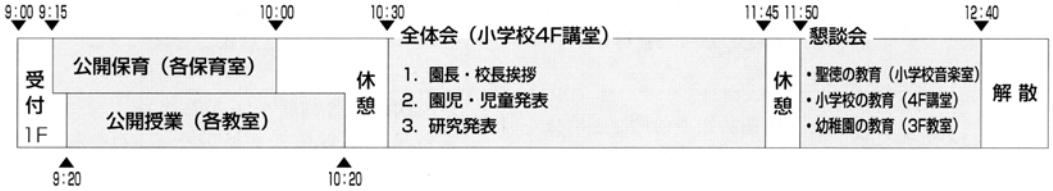
発　表　会　要　項

1．主　題：英才教室の追究

知能開発を目指した学習指導

考える力を育てる保育

2．時　程



3．内　容

(1)　授業公開及び保育公開

◇　**公開保育**（幼稚園　9：15～10：00）　**※4・5歳は、興味・関心に応じた選択制になっています。**

年齢	組	領　域	あそび設定の視点	あそびの題目及び内容	会場	頁
3歳	ほし	クラス活動（知能）	ことばの世界を広げ、考える楽しさを育てる指導	仲良しあわせ “電車なら線路、バスなら？”	ほし	18
	はな	クラス活動（造形）	絵の具の感触・混色を楽しみながら、想像力を育む	フィンガーペインティング ～みんなで大きな気球を作ろう～	はな	21
4歳	そら	リトミックあそび	リズムを感覚的に捉える音の聴き分け活動	だれのお家かな？ ～絵パネルを使って～	そら	23
	もり	知能あそび	一人ひとりの個性と創造性の育成を目指した指導	『家紋の仲間集め』 ～似ている形を見つけよう～	もり	25
5歳	つきやま	体育あそび（選択制）	一人ひとりの発達段階に応じた体育指導	跳び箱じゃんけんゲームに挑戦！	ホール	29
		造形あそび（選択制）	創造性を豊かにする表現活動	お花を作ろう ～世界にひとつだけの花～	つき	31

◇　**公開授業**（小学校　9：20～10：20）

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
1年	あさぎり	ゲーム工作	紙工作を通して創造的知能の育成を目指した指導	オリジナル輪投げづくり ～支柱の立て方を工夫しよう～	あさぎり	35
	しらさぎ	数　学	ゲームを通して柔軟な思考を育てる指導	等不（とうふ）ゲームに取り組みます。工夫して式を作ります。	しらさぎ	37
2年	あさま	国　語	「感情」教材を通した、一人ひとりの個性に応じた学習指導	「みかんのきの寺」和尚さんと子どもたちの行動と気持ちを予想します。	あさま	39
	ほくと	理　科	コマづくりを通し、科学的思考と創造的知能を養う指導	長い時間まわり続けるコマはどのような特徴があるかを考えます。	情報室	42

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
3年	のぞみ	知能訓練A	ゲームを通して創造的知能の開発と育成を目指した指導	『熟語ドミノゲーム』～持ち札を活かして熟語をたくさん思いつこう～	のぞみ	44
	はやて	知能訓練B	言葉づくりを通して創造的知能の開発と育成を目指した指導	『クロスワードの思いつき』～マス目にうまくはめ込もう～	はやて	48
4年	くろしお	国　語	思考の流暢性（拡散思考）の育成をねらった指導	『ボケとツッコミ』テンポの良い発話を通して、相手に対する「ことばの効き目」を意識化させます。	くろしお	52
	はやぶさ	地　理	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導	地形図から等高線を読み取り、ある場所から見える風景をイメージします。	はやぶさ	55
5年	はまかぜ	リーダーインミー	創造性豊かに伝え合い対話を通し深い学びを目指す指導	『ぼくも幸せ・○○も幸せ』～WIN－WIN～ 15秒CM　創作発表	はまかぜ	57
	わかしお	英語A	一人ひとりの個性や興味・関心・能力に応じた英語教育	動物の特徴を表す英語表現を様々な活動を通して、身につける。	わかしお	59
		英語B	一人ひとりの個性や興味・関心・能力に応じた英語教育	動物の特徴を表す英語表現を様々な活動を通して、身につける。	あずさ	61
6年	あずさ	理　科	一人ひとりの個性に応じ、沸点上昇の要因を探る	水溶液の沸点が純水よりも高くなる要因を、班毎の実験を通し、探っていく。	実験室	63
	やくも	歴　史	先人の知恵や取り組みを学び、創造的知能の活用を目指す	江戸時代の自然災害を取り上げ、そこにかかわった人々の苦労や知恵を学び現代に生かす。	やくも	66

⑵ **全体会**　（会場：講堂　10：30～11：45）

＊　あいさつ　　「英才教育の成果発表」　　園長・校長：和　田　知　之

＊　園児発表　　5歳児　歌　唱

　　4年生　合　唱

＊　研究発表　　「本校の自由研究にみられる児童の個性・創造性」

自由研究担当・数学科主任：米　持　　勇

⑶ **懇談会** （会場：講堂・3階教室　11：50 ～ 12：40）

＊　懇談会は、下記の三つの分科会に分かれて行います。

<table>
<tr><th>分科会名</th><th colspan="2">主　題</th><th>主な出席教員</th></tr>
<tr><td>聖徳学園の教育</td><td colspan="2">聖徳の教育の特色
（聖徳学園小学校の概要及び入学についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。）</td><td>園長・校長
小学校担当者</td></tr>
<tr><td>幼稚園教育</td><td rowspan="2">本日の保育・授業をもとに</td><td>創造的知能の開発と育成を目指した学習指導
個性と能力差に対応した複数指導（担任）制
（入園・保育内容についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。）</td><td>松浦教頭
幼稚園担当者</td></tr>
<tr><td>小学校教育</td><td>創造的知能の開発と育成を目指した学習指導
個性と能力差に対応した複数指導（担任）制
（教科教育についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。）</td><td>齊藤教頭
知能訓練担当者
小学校担当者</td></tr>
</table>

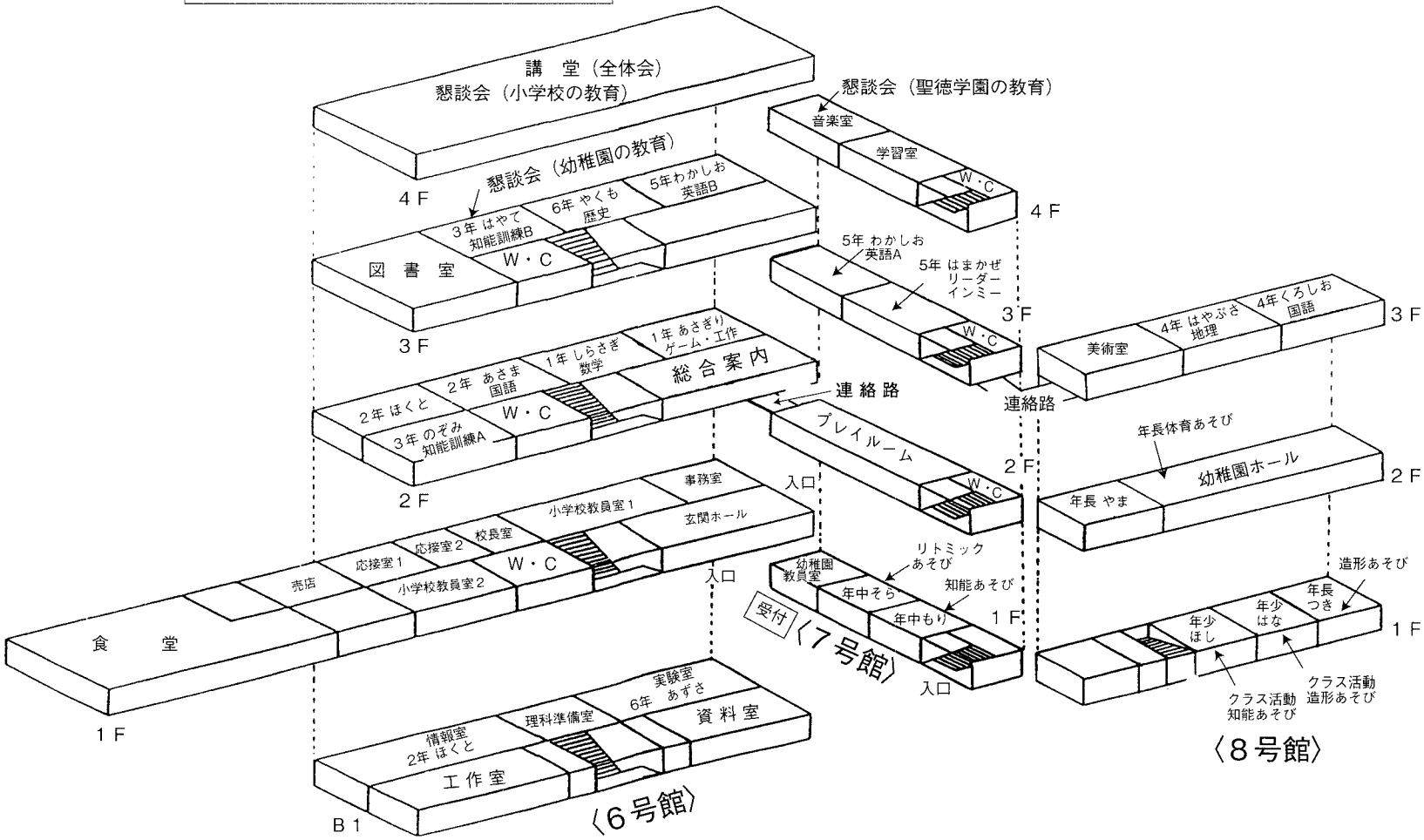
＊　**総合案内（9：00 ～ 10：30）**

6号館2Ｆ（１年しらさぎ組前廊下）に、教職員・案内役が待機しております。教室の場所、授業案内等、ご質問がございましたら、お気軽にお声がけください。

また、本日の内容及び本学園の教育についてのご意見やご質問がありましたら、懇談会へ是非ご参加ください。そちらでお受けいたしております。

聖徳学園 幼稚園 小学校 案内図

６号館と７号館は２階で、７号館と８号館は３階で連絡しています



幼 稚 園 の 部

本日の公開保育について

本園では、「自由保育」を実施しておりますが、その主な活動は、

自由あそび

カリキュラムあそび

の２つの方法で進めています。

カリキュラムあそびは、

◇知能あそび

◇体育あそび

◇リトミックあそび

◇造形あそび

◇英語あそび　があります。

４歳・５歳児は、この中の５つのあそびの中から２つのあそびを設定しました。

５歳児は２つのあそびの内容を担当の先生より聞いて、自分の好きなあそびの方を主体的に選択して遊びます。

３歳児は、年齢や実態を考慮して、クラス活動の中でカリキュラム遊びを取り入れて、進めています。

本日の活動は下記の通りです。

		9時15分～10時00分		内　容
3歳児	ほし・はな	ほし	• クラス活動 （知能あそび）	仲良しあわせ “電車なら線路、バスなら？”
		はな	• クラス活動 （造形あそび）	フィンガーペインティング ～みんなで大きな気球を作ろう～
4歳児	そら・もり	そら	• リトミックあそび	だれのお家かな？ ～絵パネルを使って～
		もり	• 造形あそび	『家紋の仲間集め』 ～似ている形を見つけよう～
5歳児	つき・やま （選択制）	• 体育あそび		跳び箱じゃんけんゲームに挑戦！
		• 造形あそび		お花を作ろう ～世界にひとつだけの花～

選択の時間　　9時00分から9時15分　子どもたちが、内容説明を聞いて選択します。
選択の場所　　5歳児　やまぐみにて行います。

クラス活動（知能あそび）指導案

9：15～10：00　於：ほし組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと５つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に造形的な遊びを取り入れながら進めていく。

指導者　松　浦　雅　美
久　保　千　春
園　山　恵理子

1. **年　齢**：3歳児（ほし組）
2. **あそび設定の視点**：ことばの世界を広げ、考える楽しさを育てる指導
3. **教材名**：仲良しあわせ　～電車なら線路、バスなら？～
4. **本時刺激される知能因子**：概念で関係を認知する（CMR）
5. **本時のねらい**：概念的なペアや、同関係となることばを類推することにより、概念で関係を認知する能力を育てる。
6. **教材について**

年少クラスの子ども達を見ていると、生まれてから幼稚園に入園するまでの成長、そして、入園してから今日までの日々の成長がとても大きく感じられ、ある時は感動し、ある時は驚きを覚えることがある。一概に成長といっても様々あり、身体、心、行動…といったことが思い浮かぶが、ことばもその一つである。

泣いたり笑ったりすることで気持ちを表現するところからスタートし、それが、強弱のある音（声）の赤ちゃん語になり、徐々に「な（さかな）」「まンま（まま）」等となった後に、「ようちえん たのしい」「きゅうしょくのスパゲティだいすき」といった具合に変化（進化とも言えよう）していく。ことばの一つひとつには意味があり、その意味というのが“概念”になるわけだが、幼児期は、概念を大きく吸収していく大切な時期であるので、本時に於いても、概念の器を広げるための刺激が大いに出来る様、心掛けていきたいと思う。

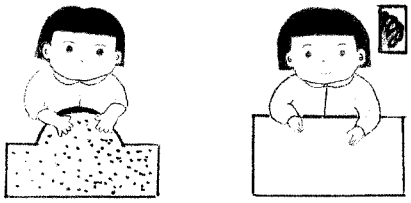
例えば、外遊びの場面絵と室内遊びの場面絵が出され、折り紙とシャベルの絵カードがあったとする。『それぞれ、仲良しを考えてカードを置きましょう』と問うと、子ども達は普段の生活経験から、外遊びにはシャベルのカードを、室内遊びには折り紙のカードを置くことが出来るであろう。それぞれのことばが、どのような意味であるかをきちんと理解しているからこそわかるのである。これを発展させると、“電車は線路を走る。バスは？”という発問になる。バスとバス停、バスと運転手、バスと…等、バスのペアはいろいろ考えられるが、この場合は『走る場所』という概念の枠で考えなければならないので“道路”というのが正解になる。単にことばのペアを考えるのではなく、ことばの関係を捉えて類推するおもしろさが存分に味わえるのである。

知能あそびのねらいである「楽しく遊びながら知的好奇心を育て、考える力（幅広い思考力）を育てていく」活動となる様、遊びを展開していきたい。

7. 園児の様子

入園して約２ヶ月、生活のリズムをつかみ、一人ひとりが好きな遊びを見つけながら園生活を楽しんでいる。少しずつお友達にも関心を示す様になり、皆でやるからこそ、お互いに刺激を受けたり与えたり出来るというおもしろさを味わっていることもある。自由あそびでは、おままごとや粘土、アスレチック、砂場遊びなどに夢中になっている。知能あそびに於いても、好奇心旺盛な瞳を輝かせながら楽しむ姿が印象的である。反面、まだ年齢的なこともあって、長い時間の集中が難しかったり、いつもとは違う状況に戸惑ったりすることも予想されるので、子ども達の様子を複数指導の目できちんと受け止めていきたい。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. あいさつ・出席確認	○出席確認をしながら、本日の健康状態等も把握する。
2. 展開 (1) 半円になって着席。場面絵２種類といくつかの絵カードを提示し、それぞれペア（仲良し）を考えながら絵カードを置いていく。 （問題例）◎外遊びの場面◎室内遊びの場面  ☆絵カード…シャベル、折り紙など。	Ｔ１：概念の遊びであるので、きちんと名称を確認しながら提示をする。ペアを発表出来た子どもには理由も聞いて、しっかりと全体で共有出来るようにする。 Ｔ２・Ｔ３：それぞれ、子どもたちの間に入り、聞きもらしている子どもがいないか、また理解出来ているかを把握し、適宜助言をする。
(2) テーブルに着席。発問を聞いて、同関係を考えながら、個別のプリント冊子に絵シールを貼っていく。 （問題例）◎スプーンでカレーを食べます。では、箸で食べるのは？ 	Ｔ１：(1) よりも思考がステップアップするので、より丁寧な発問を心掛ける。また、同関係が正しく意識出来る様、理由付けも丁寧にする。 Ｔ２・Ｔ３：机間巡視をしながら、子ども達の理解の具合を把握し、Ｔ１と連携を図ったり適宜助言をする。

3. 片づけをする。	○すみやかに片づけられる様、指示する。
4. おわりのあいさつをする。	○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

9. 評　価

• 活動後、本時の内容を振り返り、子どもたちの一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

クラス活動（造形あそび）指導案

9：15～10：00　於：はな組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと５つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に知能的なあそびを取り入れながら進めていく。

指導者　北　村　満利恵
神　山　祐　希

1. 年　齢：3歳児（はな組）

2. あそび設定の視点：絵の具の感触・混色を楽しみながら想像力を育む。

3. 主　題：フィンガーペインティング　～みんなで大きな気球を作ろう～

4. 主題について

自由に感触や混色を楽しんだり、指で絵を描くことを楽しむフィンガーペインティング。日頃から大胆なあそびが大好きなはな組の子どもたち。毎年、この教材を初めて行うときのワクワクした表情、夢中な姿がとても印象的であり、注目してもらいたい。聖徳幼稚園では、豊かな感性を育み、創造性を育てる教材選びをしており、また、複数指導の利点を生かしきめ細やかな指導により個々に応じた技術の習得を目指して指導をしている。今回は水のりと絵の具を使用し、子どもたちの感性を刺激し、想像力を高める活動にしたい。

5. 園児の様子

入園して間もない子どもたちは、園の生活、教師や友だちとの関わりに慣れてきた様子。
自分の好きなあそびも少しずつみつけることが出来るようになってきた。自由あそびではおままごとやプラレール、お外ではアスレチックや泥水あそびに夢中である。4つのカリキュラムあそびにも興味を持って取り組んでおり、中でも造形あそびは素材から作品へと形になっていく喜びを感じ、意欲的な姿が見られる。今回は、できた絵や色を重要視するのではなく、感触・混色を自由に楽しんでもらいたい。

6. 本時のねらい

感触・混色を楽しみながらイメージの世界を広げていく。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶	〈2人の指導者の動き〉 Ｔ１・Ｔ２：活動に入る挨拶をする。
2. 色の絵本を読む。	Ｔ１：絵本を読む。
3. 本時の内容の説明を聞く。	Ｔ１：本時の活動内容を説明する。 Ｔ２：子どもたちの聞く様子を観察し、個別に声をかけながら援助する。

4. 絵の具に触れる ※使う色⇒青・黄色・赤	T 1・T 2：自由に触ったり、絵を描いたりすることを声掛けしていく。嫌がる子どもには出来る範囲で進められるように配慮する。
5. 色を混ぜる ※青＋黄色＝黄緑 黄色＋赤＝だいだい	T 1・T 2：色の配分に気を付けながら分ける。色の感触・混色の子どもたちの声を拾う。
6. 絵を写し取る	T 1・T 2：ニューカラーでそれぞれの絵を取り、乾燥棚へ置く。
7. 色を混ぜる 2 ※それぞれに白を配る。	T 1：白を配る。 T 2：乾いているものから気球に貼っていく。
8. 気球を鑑賞し、次に周りに何があるといいか考える。 ※空にあるもの・いるものなど	T 1・T 2：子どもたちの想像力を引き出す言葉掛けをし、次の活動につなげる。

8. 評　価

それぞれの子どもたちが意欲的に取り組み、それぞれの表現を楽しむことができたかを指導者間で確認し、評価していく。

リトミックあそび指導案

9：15～10：00　於：そら組保育室

指導者　高　井　正　恵
水　嶋　知　佳

1. 年　齢：4歳児（そら組）

2. あそび設定の視点：リズムを感覚的に捉える音の聴き分け活動

3. 主　題：だれのお家かな？　～絵パネルを使って～

4. 主題について

音楽（音）は、子どもたちの耳に直接届くことができる。それだけ音楽はインパクトがあり、イメージを広げられるからだ。本時は、絵パネルを使って音の聴き分け活動を行い、基礎リズムを感覚的に捉えられるように進めていきたい。またそれぞれのイメージに合わせた動きも楽しんでいきたい。

5. 園児の様子

新年度がスタートして、子どもたちは新しい環境にもだいぶ慣れてきた。今では、ごっこあそびやプラレールなど好きなあそびを通して、友だちとの関わりを楽しんだり、お気に入りのうたを大きな声で口ずさむなど開放的な様子も見られる。

リトミックあそびにおいても音に耳を澄ませ、イメージを膨らませながら表現活動を楽しむ姿が見られる。

6. 本時のねらい

音を聴いて、イメージを広げながら自分の思った動きをのびのびと表現できるよう、感覚的反応を高めていきたい。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
～準備：はだし・円になる～	○空間を広く使えるよう、環境を整える。 ＊Ｔ１：全体を通してピアノをベースに活動を進めていく。 ＊Ｔ２：子どもたちと一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。
1. リトミックあそびのうた・あいさつ	○これからリトミックあそびを始める意識を持たせるようにする。
2. 模唱（お返事ハイ） 『○○くん』→『はぁい』	○出席確認及び本日の健康状態把握として、一人ひとりの子どもに呼びかけ、きちんと音に合わせて答えられるよう配慮する。

3. ウォーミングアップ 「♩」…歩く　　「𝅗𝅥」…ゆっくり歩く 「♪」…かけ足 〈合図〉 ☆高い音……頭の上で手をたたく ☆低い音……しゃがんで床をたたく ☆高低同時…片手を上にもう片手は床をたたく ☆リズム“♪♩♪♩♩|𝅗𝅥>” …アクセントで手をたたく ☆呼びかけ“♫♫♩𝄾” …友だちを見つけて握手する	＊Ｔ１：即時反応の合図を明確に子どもたちにわかり易いように伝える。 ＊Ｔ１：子どもたちの動きを見て、合図のタイミングを工夫する。 ＊Ｔ２：なかなか取り組めない子どもがいたら、励ましたり、一緒に行う。 ＊Ｔ２：反応の速い子どもを認めていく。 ＊Ｔ１：速さを変えていき、タイミングをつかませるようにする。 ○友だちは何人でもよいという指示をする。
4. 模唱♪朝は何を食べたの？	＊Ｔ１：子どもたちの発表意欲を尊重していく。
5. 絵パネルあそび ①クイズ：何の音楽だ？ ②それぞれの動きをステップする ～ＧＯ＆ＳＴＯＰ～ ③音楽を聴いてパネルの前に集合！ ④お家ごっこ ⓐ ♩ …兵隊　ⓑ ♪ …小鳥 ⓒ 𝅗𝅥 …クマ　ⓓ ♫ …馬 ※バリエーション→お引越し・オオカミ出現など	＊Ｔ１：子どもたちのイメージを引き出していく。 ○何人かに動きの見本をしてもらう。 ＊Ｔ２：子どもたちのイメージが広がるよう、一緒に動くなど援助していく。 ＊Ｔ２：悩んでいる子がいたら、一緒に考えるなど援助していく。 ○ゲームを通して、リズムを感覚的に捉えられるようにする。 ＊Ｔ２：空間の使い方など、安全面に考慮する。
6. 終わりのあいさつ	○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

8. 評　価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

知能あそび指導案

9：15～10：00　於：もり組保育室

指導者　伊　奈　恵　理
飯　濱　久美子

1. 年　齢：4歳児（もり組）

2. あそび設定の視点：一人ひとりの個性と創造性の育成を目指した指導

3. 教材名：家紋の仲間あつめ　～似ている形を見つけよう～

4. 本時刺激される知能因子：図形で分類を拡散思考する（ＤＦＣ）

5. 本時のねらい

いくつかの家紋のカードを見て、形の共通点を捉え、いろいろな分類基準を考えて仲間あつめをしていくことにより、図形で分類を拡散思考する。

6. 教材について

子ども達の知的好奇心を刺激しながら、さまざまな思考力を養う教材を考える時、興味を引く素材や内容が、意外に身近にあったりすることがある。知能あそびでは、これまでにも図形的な教材の中に基本図形だけでなく、恐竜や魚、万国旗や紋章、家紋などを素材に作成している。その取り組みから、その後の新しい興味と知識につながることもある。

今回は、年中児（4歳児）に対して日本の伝統的な家紋を取り上げ、その仲間あつめをしたいと考えている。日常では馴染みが薄くなっているが、家紋は2万種もあるといわれるほどいろいろな形があり、また花や葉、鳥など、自然に目にする図柄もたくさん含まれているため、仲間あつめの素材として適していると考えた。同時にこの機会に日本の古くからの文化にもぜひ、触れてほしいと考えている。

はじめグループ活動からスタートし、たくさんの家紋カードの中から、形の特徴を捉え、共通部分を見つける。グループで相談し発表し、またほかのグループの発表を聞くことで、様々な着眼点があることに気づき、その後の個別活動で、個人個人の分類の発見につながるように考慮していきたいと思う。

7. 園児の様子

年中になり、子ども達は張り切って様々なことに挑戦する中で、少しずつ一人ひとりが自分らしさを出せるようになってきた。

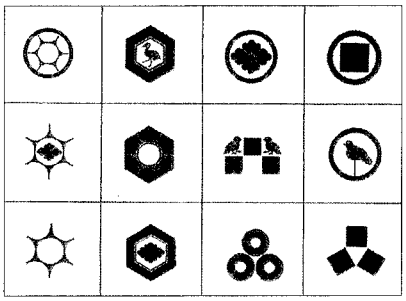
カリキュラムあそびにおいて知能あそびは、今年度からクラス単位で行うようになった。その日のあそびの内容を聞き、「面白そう！」「やってみたい！」と、その日の活動に期待を持ち、時間いっぱい楽しみながら取り組んでいる。そして「楽しかった！」「次のあそびも楽しみだ！」次回に期待をもっている。

4歳児（もり組）

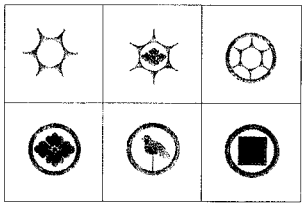
大変好奇心旺盛で、自分の思いを表現したいと思っている子どもが多い。今まで取りくんだ「スリーヒントクイズ」では、聞いたヒントから少しでも早く答えを見つけ出そうとする意欲的な姿が見られた。また「数の大きさくらべ」の数の大小を見比べるゲームでは、友だちと楽しみながら何回戦も取り組んでいた。

『家紋』は、子どもにとっては珍しい題材ではあるが、図形的に捉えることで楽しめる教材である。そしてグループ活動の作業から、協力して一緒に考える楽しさや、個々でじっくり考え完成させる達成感を味わって欲しいと思う。もりぐみの子どもたちが、充実した時間を過ごせるように指導していきたい。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりのあいさつをし、出席確認をする。	• 出席確認して、本日の健康状態等を把握する。
2. 全員で集まって座り、説明を聞いてやり方を理解する。	〈T 1〉 • マグネット付きの家紋カードを提示し、グループの友だちと形をよく見て共通点のあるカードを3枚以上集めて仲間を作ることを確認する。 〈T 2〉 • 子どもたちがやり方を理解しているか、一人ひとりの反応と様子を見る。
3. 椅子を出してそれぞれの席につく。	〈T 2〉 • 4人のグループになって、それぞれの席につくように指示する。
4. グループでの家紋の仲間あつめ 『家紋のカード』（マグネット付き）を、グループで協力しながら、3枚1組で家紋の仲間あつめをする。 • それぞれのグループで考えた集め方を発表し、どこが共通点かを確認しあう。  ＊他5パターン	〈T 1・T 2〉 • 各グループに家紋カードとマグネットボードを配る。 • 机間巡視して、やり方を理解しているか、適宜指導、助言していく。またグループで協力して取り組めるよう留意する。 〈T 1〉 • 順に発表させる。分類の基準、似ているところをどう考えたか、続けて聞いていく。

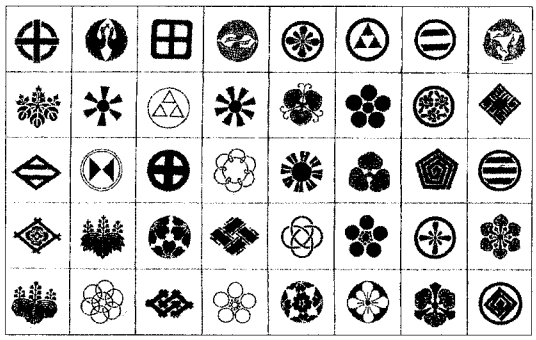
《予想される仲間集めの例》

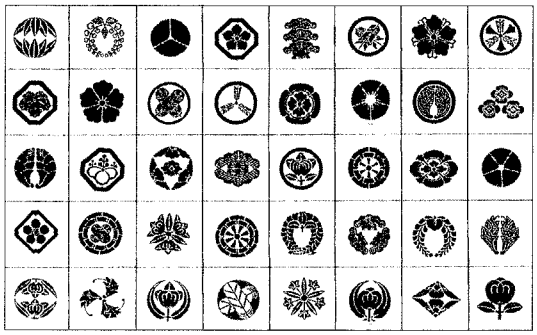


・グループごとに、カードとボードを片付ける。

〈T1・T2〉
・終わったグループから片付けの指示をする。

5. 個別での仲間あつめ
『家紋カード』を使って、仲間あつめの説明を聞き、やり方を理解する。





・個別に台紙を1枚ずつ取り、3枚以上の仲間を考え、出来たらのりで貼る。
・貼り終えたら、指導者の確認後、次の仲間あつめをする。

〈T1〉
・個別の家紋カードと台紙での、個別活動のやり方を説明する。
〈T2〉
・家紋の入った箱と台紙を並べる。完成した台紙を入れるトレーを配る。
・やりかたを理解しているか全体の反応と様子を見る。

6. 片付け
・グループごとに片付ける。

〈T1・T2〉
・机間巡視して作業や動きがスムーズに行われているか適宜指導、助言していく。

	• どのように仲間あつめをしたか、台紙に記入していく。
7. 終わりのあいさつをする。	〈T1・T2〉 • 片付けの手順を指示する。 • 片付けが速やかに行えるように対応する。 • 本時のまとめをし、終わりのあいさつをする。

9. 評　価

活動後、本時を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みや反応、理解度など、指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかを、まとめて今後の実践に活かしていく。

① 家紋の興味を持ち、共通点のある仲間あつめができたか。

② 1枚のカード（家紋）をいろいろな角度から見て、仲間あつめができたか。

体育あそび指導案

9：15～10：00　於：幼稚園ホール

指導者　佐藤憲夫
永坂圭子

1. **年　齢**：5歳児（つき組・やま組）
2. **あそび設定の視点**：一人ひとりの発達段階に応じた体育指導
3. **主　題**：跳び箱ジャンケンゲームに挑戦！
4. **主題について**

跳び箱の開脚跳びを跳ぶための指導として、一番大事なのはしっかりと手をついて身体を支えて跳び越すことで、手をつくということが一番大事である。幼児期の跳び箱の指導法としては、まず走る助走というものは必要ではなく、まずは手と足でカエルのような格好をして跳び箱のところまで移動したら、勢いをつけずにしっかりと手をついた指導法を行うことで、安全にできるようにしたい。

今回、跳び箱の跳び方をジャンケンに置き換えながら、高さ感覚やバランス感覚、そして着地など基礎的な技能を養っていければと思う。跳び箱を使った遊びを通して、空間での様々な身体表現を楽しませたり、助走からの踏み切り、腕支持、重心の引き上げ、そして安定した着地といった運動感覚や身体コントロールも育てていけたらと思う。

本時では、最初のウォーミング・アップとして、「クマさん電車（歩き）」、「片足クマさんに変身して歩く」や「カエルさんになってピョンピョン歩く（手・足・手・足の順番に進む）」を行った後、腕支持跳び三種類（跳び上がり、またぎ乗り、開脚跳び）の練習を行い、最後に応用としてチームに分かれて跳び箱ジャンケンゲームまで発展させて盛り上げたい。

5. **園児の様子**

身体を動かして遊ぶことも大好きな子どもたち。日常の自由あそびや体育あそびでも、氷鬼や刑ドロやリレーなどが大好きで走り回って遊ぶ姿が見られる。また年長児になり、腕の力もついてきて、雲梯にもどんどん挑戦していっている。そこで本時のように跳び箱にも挑戦して、身体を腕で支える力や跳躍力などを養っていく機会を作っていければと思う。

6. **本時のねらい**

- 跳び方を体験しながら、技能や体力を養う。
- ルールを理解しながらゲームを楽しむ。

7. **本時の指導過程**

＊最初に2つ（造形あそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9：00～9：15　　場所：幼稚園ホール

5歳児（つき・やま組）

園児の活動	指導内容及び指導上の留意点
1. 整列	• クラスごとに整列させる。 • 整列させ、元気よく挨拶ができるようにする。
2. 準備体操	• 体をあたため、これからの活動が十分に行えるように準備体操をする。 • 教師の動きを見ながら、元気よく体操を行えるようにする。 ～指導者の動き～ T 1：子どもたちの前で見本を示す。 T 2：巡回しながら一人一人の様子を見る。
3. 本時の内容と説明	• 本時の予定と注意事項を説明する。
4. 練習1（フットワーク）	1）クマさん電車（歩き） 2）片足クマさん歩き 3）カエルさんになってピョンピョン歩き
5. 練習2（腕支持跳び）	1）グー跳び　→1）腕支持跳び上がりの動き 2）チョキ跳び→2）腕支持またぎ乗りの動き 3）パー跳び　→3）開脚跳びの動き ～指導者の動き～ T 1：子どもたちの前で見本を示しながら、リードしていく。 T 2：子どもたちの補佐、もしくは上手に行なえている子どもを認めていく。
6. 跳び箱ジャンケンゲーム	• 2チームに分かれて、チーム対抗戦を行う。 ～指導者の動き～ T 1：ゲームがスムーズに行なえるように、リードしていく。 T 2：巡回しながら、子どもたちを補佐していく。
7. 片付け	• みんなで協力して片づけをさせる。
8. 整理体操	• 楽な姿勢で整理体操をさせる。
9. 整列・挨拶・まとめ	• 本時のまとめと次回の活動について話し、期待を持たせるようにする。

8. 評　価

• 跳び箱に興味を持って、楽しく取り組めたか。

主に、一人ひとりの取り組み姿勢や反応などを二人の指導者で確認しながら評価していく。

造形あそび指導案

9：15～10：00　於：つき組保育室

指導者　磯　沼　美　紀
荒　井　明　子

1. 年　齢：5歳児（つき・やま組）

2. あそび設定の視点：創造性を豊かにする表現活動

3. 主　題：お花を作ろう　～世界にひとつだけの花～

4. 主題について

造形あそびでは日頃いろいろな素材に子どもたちが触れられるよう、素材を吟味したり、小さな芸術家である子どもの創作意欲がいつもかきたてられうような内容を考え指導している。今回はお花という身近な題材に個々のイメージを膨らませ、自分だけのお花を作り出していく。紙粘土は扱いやすく子どもたちのイメージしたお花の形・色を表現しやすいと思われる。白い紙粘土に絵の具を混ぜ色で表現したり、ちぎったり丸めたりのばしながら、花の形を表現して楽しむことで、創造力を育てていく。

5. 園児の様子

子どもたちは新しいクラスや先生にも徐々に慣れてきたところである。自由あそびの時間には空き箱などを使い工作をしたり、工作したものを使い「くじ引き屋さんごっこ」「お店屋さんごっこ」などに発展させ楽しんでいる。年長組での造形あそびにも慣れ、じっくりと作品作りを楽しむ姿が見られる。できるだけ「発想が浮かぶように」「創造力が膨らむように」環境を作りながらすすめているところである。

6. 本時のねらい

・紙粘土に絵の具を混ぜ込みながら、自分の思い描くお花を作っていき創造力を育てていく

7. 本時の指導過程

＊最初に2つ（造形あそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。
時間：9：00～9：15場所：ホール

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
〈材料〉 ・紙粘土 ・絵の具（赤・黄・青・黄緑・ピンク・茶色） ・ストロー・カップ	
1. 始まりの挨拶をする。	T1：これからの活動に期待を持てるように説明していく。

2. 本時の内容の説明を聞く。	T 1：大きな流れを説明する。
3. 植木鉢を作る ・絵の具を紙粘土に練りこみ土にする紙粘土をつくる ・カップに紙粘土をつめる	T 2：材料を配る T 1：紙粘土に絵の具を混ぜながら、手順を説明する。 T 2：子どもたちの理解の様子を見ながら援助していく。
4. お花を作る ・紙粘土に絵の具を混ぜる ・植木鉢に茎（ストロー）を立て、花びらをつけながらいイメージしたお花を作っていく ・茎にも葉をつける	T 1：イメージしたお花の色の粘土を作り、花びらをつけお花をつくって仕上げていく。 T 2：子どもたちの理解の様子を見ながら援助していく。
5. 鑑賞する。	T 1 T 2：子どもたちと一緒に出来上がりを鑑賞する。
6. 挨拶をする。	

8. 評　価

・子どもたちがイメージを膨らますことができていたか。

＊これらの点を指導者間で確認し、評価していく。

小 学 校 の 部

ゲーム工作科指導案

9：20～10：20　於：あさぎり組教室

指導者　淺　利　絵　海
土　田　隆　仁

1. クラス名：あさぎり組（1年生）

男子21名　女子11名　計32名　聖徳式（個人）平均IQ141.2

2. 授業設定の視点：紙工作を通して創造的知能の育成を目指した指導

3. 教　　材：オリジナル輪投げづくり　～支柱の立て方を工夫しよう～

4. 教材について

本校では知能教育の一環として、1、2年生を対象にゲームと工作の授業を行っている。工作では素材の特性を活かした製作活動を通して、創りあげる喜びを感じながら創意工夫する姿勢と、作品を完成させていくまでの過程をイメージし、見通しをもって作業を進めていく力を育てている。

前時の授業では、数種類の紙を使用し、一枚の紙から立体的なものを表現する立体工作を行った。本時の『オリジナル輪投げづくり』では、それぞれの紙の特性（強度や加工のしやすさ）を活かして支柱の立て方、太さや形を考え、また盤にも遊びの工夫ができるようにイメージを膨らませてほしい。自分で考えて作った輪投げは、既製のものにはない楽しさがある。どの児童も楽しく遊べるオリジナルの輪投げを創意工夫しながら完成させてほしい。

5. クラスの実態

入学して2ヶ月が過ぎ、学校生活にも慣れ毎日楽しく過ごしている。全体的に活気があり、折り紙や切り貼りなどの手作業を楽しみながら行うことができている。

工作の授業では、これまでに紙飛行機作りと立体紙工作（動物）を行った。一度作り始めるとどの児童も熱中して作業に取り組み、納得がいくまで作り直す姿が多く見られた。紙飛行機を飛ばす際にも、自分よりよく飛んでいる紙飛行機を見て、どうすればより飛ぶようになるのかを自発的に考え、再挑戦したいと望む声が多かった。

下記の表は、あさぎり組のIQ及びFQ（知能因子指数）の平均である。工作で主に刺激される因子は『図形』と『拡散思考』が考えられるが、表からも読み取れるように、あさぎり組は『図形』の指数が高く、形を使って考えることが得意な児童が多い。本時の『オリジナル輪投げづくり』でも夢中になって作業に取り組むことが予想できる。『図形』に対する興味関心の強さで意欲と集中力が充実し、支柱や盤を自分なりに工夫することで拡散思考を働かせていきたいと考える。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
141.2	148.6	138.3	136.4	137.8	153.1	135.6	136.5	142.8

6. 指導計画（8時間）

立体紙工作 …… 4校時

オリジナル輪投げ作り …… 3校時

オリジナル輪投げ作りの仕上げと発表 …… 1校時（本時）

7. 本時のねらい

オリジナル輪投げづくりを通して紙の特性を活かし、創意工夫する力を養う。

8. 本時の指導過程

	教材の内容及び学習活動	指導上の留意点等
前時まで	1. 立体紙工作 ・数種類（上質紙、画用紙、工作用紙）の紙を使用して、丸めて筒にしたり箱状にして、自分の好きな動物を立体的に表現する紙工作を行う。	・一枚の紙から好きな動物を立体的に表現する際に、それぞれの紙の強度や加工のしやすさが違うことを知り、その特性を活かして製作できるように促す。
	2. オリジナル輪投げづくり ・数種類の紙を使用して、自分だけの輪投げを製作する。	・支柱に適する紙は何か、支柱が倒れないような立て方や太さを考えながら、創意工夫して製作できるように促す。
	3. 自分で作った輪投げで遊ぶ。 ・輪投げで実際に遊び、改良点を探る。	・遊びを通して改良点を探り、次回への展望を持たせる。
本時	4. 挨拶をする。 ・友達の作品の工夫した点を参考にする。	・挨拶をし、授業に臨む姿勢を整える。 ・出席を確認し、本日の健康状態を把握する。 ・友だちの作品の工夫した点を知らせ、より楽しめる輪投げの製作に活かす。
	5. 作品の仕上げをする。 ・オリジナルの輪投げを完成する。	・完成品として丁寧な仕上がりを意識させる。
	6. 自分の作品に名前をつける。 ・作品名をつける過程で工夫した点を考え、自己評価をする。	
	7. 自分の作品や友達の作品で遊ぶ。	・できるだけ、時間内に輪投げを完成して遊ぶことができるように、必要な助言を与える。
	8. 片付け ・全員製作した輪投げを提出する。	・片付けの手順を指示し、速やかに片付けをさせる。
	9. 終わりの挨拶をする。	・終わりの挨拶をしっかり行うように促す。

9. 評　価

授業後に本時を振り返り、児童一人ひとりの取り組みや反応から、技術的な指導や助言について指導者二人で確認をし、ねらいを達成できたかどうかをまとめて今後の実践に活かす。

数学科学習指導案

9：20 ～ 10：20 於：しらさぎ組教室

指導者　谷　口　　優
桂　田　　晶

1. **クラス名**：しらさぎ組（1年生）
男子20名　女子11名　計31名　聖徳式（個人）平均 IQ141.5

2. **授業設定の視点**：ゲームを通して柔軟な思考を育てる指導

3. **題　　目**：等号・不等号を利用したゲーム

4. **題目について**

本校の数学の授業では様々なゲームを取り入れている。これはゲームを行う中で様々な計算が必要になり、自然と楽しみながら計算練習を行えるからである。

本時の内容は「等号・不等号を利用したゲーム」である。「3+2=5」という数式は「3+2の結果が5」という意味だけにとらわれがちである。本来等式は「=」の右と左がイコールの関係にあり、「3+2=」の右側には無限とも言える数式を入れていくことができる。一年生のこの時期に等式・不等式を扱うことで、子ども達はより拡散的に考えられるようになり、今後の学習において柔軟な思考を育てていくうえでも重要だと考えている。

5. **クラスの実態について**

入学して二カ月足らずの期間であるが、子ども達は学校での生活リズムにも慣れてきている。授業に対しても意欲的に取り組んでおり、発言も積極的である。普段の授業の中でもゲームに取り組む機会は多く、子ども達はそれを楽しみにしている様子である。一方、能力面や姿勢面では差も見られるので、二人指導制を生かして、できるだけ個々に対応していくように心がけている。

下に本クラスの IQ（知能指数）と FQ（知能因子指数）の平均を示した表を載せておいた。この授業では記号の因子を刺激し、拡散思考、集中思考を伸ばしていく。

	IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
平均	141.5	150.7	137.8	136.2	139.9	151.8	136.0	138.3	141.5

6. **指導計画**

不等号の意 …… 3校時
等号の意味 …… 2校時
等号・不等号の活用 …… 3校時（本時は2校時目）
等号・不等号のまとめ …… 2校時

しらさぎ組（1年生）

7. 本時のねらい：

様々な立式ができることに気付かせ、ゲームに取り組ませていくことで、与えられた条件の中で試行錯誤し、見通しを持って式を作る力を育てていく。

8. 本時の指導過程

ねらい	学　習　活　動	指導の重点及び留意点
(1) 等号・不等号の式作りを復習し、色々な式が作れることに気付かせる。	与えられたカードから何通りもの式が作れることを理解する。 • 提示されたカードを自由に並び替えて、等号・不等号の式を各自で作る。 • 自分の式を発表する。	• 様々な式ができることに気付かせる。 例 5＜2＋4 5－2＜4 4＜5＋2 など
(2) ゲームのやり方を通して、与えられた数値で工夫して等号・不等号の式作りを考えさせる。	ゲームのやり方を理解する。 • 指導者と子ども達で対戦する。 • 与えられたカードで工夫して立式を行い、発表する。	• 与えられたカードを使って工夫して式を作らせていく。
(3) ゲームに取り組ませる。	2人1組に分かれてゲームに取り組む。 （ゲームのルール） • 数字カードを良く切り山にする。 • 一手のうちで以下を行う • 数字カードを4枚引く • プリントの枠内に自由に入れる • 山が無くなったら終わり。できた式の個数で勝敗を競う。	• 子ども達の能力に応じてチーム作りを行う。
(4) ゲームを振り返らせる	ゲームを行ってみてわかった勝つためのポイントなどを発表する。	• 式を作りやすいポイントなどを共有させる。

国語科学習指導案

9：30～10：30　於：あさま組教室

指導者　**長谷川　和　暉**

1. クラス名：あさま組（2年生）

男子14名　女子17名　計31名　　聖徳式（個人）平均IQ139.8

2. 授業設定の視点：「感情」教材を通した、一人ひとりの個性に応じた学習指導

3. 教　　材：『みかんの木の寺』（感情教材）

4. 目　　標：感情の包摂関係（気持ちが気持ちを包み込む）を考える

5. 教材設定の理由

(1) 教材観

本校の国語科では「ことばに先行する精神発達の最前線における、児童の成長の課題に接触させることにより、児童の精神発達を促す」ことを目標に掲げている。つまり、子どもたちが日常生活の中で心に抱いているさまざまな感情、構えなどの成長の課題は、まだ意識下にあることも多い。そこで、教材文の状況設定及び人間関係を通してそれらを掘り起こし、意識化させることで内面的な成長を促すのである。

今回取り上げる「みかんの木の寺」は「感情」の領域にあたる教材であり、「感情の包摂関係を考える」ことをねらいとしている。感情の包摂関係とは、相手の気持ちを包み込む感情である。お話には、お寺の境内になっているみかんを取ろうとする子どもたちと、「こらっ」と怒鳴りはするが追い払おうとまではしない和尚さんが登場する。文章には表れていないが、子どもたちにとって和尚さんは初めて見る存在ではないだろう。また和尚さんにとっても地域に住む見慣れた子どもたちであるはずだ。そのような背景から、子どもたちからすればこの行為は盗みではなく、悪戯心からくるわるさであり、地域の結びつきの中での行為である。和尚さんにしても、その場で叱ることはせず、「明日までお待ち。まだすっぱいぞ。」などと貼り紙を出して、子どもたちに期待感をもたせているように、当時としてはある程度許容されていた行為でもあったのだろう。

しかし、お話は一転して、子どもたちがみかんをもらえると思ってお寺を訪れると、すべて無くなっていた。子どもたちは騙されたと思うが、その直後、貼り紙とともに置いてあるみかんの箱を発見する。実は、最初から子どもたちの気持ちや行動を読み、子どもたちのことを思う和尚さんの姿が見えてくる。このようなところから、「感情の包摂関係」を考えさせたい。

(2) 児童観

本学級は持ち上がりで、よくも悪くもお互いになれてきたところが多い。そのためか、大人の目を盗んで、子どもらしい悪戯をすることがある。例えば、理科の実験で砂糖水を使えば、こっそり舐めてみたり、遠足ではお弁当を食べる前に「いただきます」もせずにお菓子を食べてみたりする。子どもたちには悪気はなく、悪戯心でそうしているのである。ただこれを無邪気な行いとばか

り捉えることはできないだろう。先生の対応を見ていることはないだろうか。わざとしているのであれば、お話の子どもたちの行動と重なってくる。また、今まさに発達課題である自己中心性を乗り越えようとしているところであり、教師や親に叱られた時に、叱られていることの意味、叱っている相手の思いまで考えている子は多くはない。このような子どもたちの状態こそ精神発達の最前線と受け止めたい。

授業を進めるにあたって、お話の子どもたちの悪戯にはらはらどきどきし、和尚さんに対して「意地悪だ」と真っすぐに受け取るだろう。しかし、最後の場面で、子どもたちを大切に思う和尚さんの姿に出会い、視点を転換することで、気持ちが気持ちを包み込むということを意識するだろう。そうした刺激によって、日常生活で教師や親、はたまた友だちとのかかわりの中で、新たな視点をもたらすものと考えている。

【知能構造のプロフィール―クラス平均―】

知能指数	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
139.8	142.6	133.9	142.9	129.5	146.9	140.8	140.5	141.5

(3) 指導観

お話に登場する、お寺のみかんを取ってやろうとする子どもたちも、本学級の子どもたちも大人に隠れて、密かに悪戯をする年ごろである。そのため、多くの子どもたちがお話の子どもたちに自らを投影させて読むだろう。つまり、みかんを取ろうとする子どもたちに共感し、対する和尚さんには「自分だけみかんを食べようなんてずるい」「意地悪だ」と不信感をもつだろう。この2つの感情は、子どもたちのためにみかんを取っておいてくれた和尚さんの姿が見えた時に、子どもたちに視点の転換をもたらすことになるだろう。実は和尚さんは子どもたちを大切に見守っていたのである。時間を巻き戻して考えていくうちに、子どもたちの気持ちを包み込む和尚さんの思いに気付くことになるだろう。子どもたちの生活の中に、たてつく子どもたちと、それを受け止め、いたわる大人の関係があるのかどうか、確かめる授業でもある。

6. 指導計画（4時間扱い　45分×3　60分×1）

(1) みかんがなくなった場面までを読み、和尚さんに対する子どもたちの気持ちを読み取り、お話の展開を予想する。(45分×2)

(2) **最後の場面を読み、和尚さんの子どもたちへの思いは、いつから始まっていたのかについて考え、一貫する和尚さんの子どもたちへの思いに気付く。(本時　60分×1)**

(3)「感情の包摂関係（気持ちが気持ちを包み込む)」について、本文や日常生活から考える。(45分×1)

7. 本時の目標

本文を読み返す中で、「意地悪な和尚さん」という視点を転換し、終始一貫している和尚さんの子どもたちへの思いに気付く。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
授業の構えをつくる	●授業開始の挨拶をする。 ●素読読本を音読する。	声や姿勢に意識を向けさせる。
前回の学習を振り返り、整理する	1. 和尚さんの貼り紙を確認しながら、前時の振り返りをする。	和尚さんに対する子どもたちの気持ち（たてつく）を整理する。
予想に反したどんでん返し	2. 最後の場面を読む。	子どもたちの気持ちとは裏腹の、和尚さんの行動をつかませる。
視点の転換 (子ども目線から和尚さん視点へ)	3. 貼り紙を捉えなおす。 • みかんをとるな。まだすっぱいぞ。 • あと四、五日だ。まだとるな。 • 明日までお待ち。あと一日だ。 • みんなでおあがり。盗んで食べたらすっぱいすっぱい。	貼り紙のとらえ方を変えることで和尚さんのことを考えるよう促す。
本文を一貫する和尚さんの思いを理解する	4. 学習問題について考える。 和尚さん子どもたちへの思いは、いつから始まっていたのだろうか。	本文を巻き戻しながら、和尚さんの行動の裏にある子どもたちへの思いを考えさせる。
本時の学習を振り返る	5. ノートに学習感想を書く。	自分なりに一時間の学習をまとめさせる。

9. 評　価

授業における発言やノートへの記述から、和尚さんの一貫した子どもたちへの思いに気付くことができたか。

理科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：情報室

指導者　歌　田　翔　真

1. クラス名：ほくと組（2年生）

男子14名　女子16名　計30名　聖徳式（個人）平均IQ137.0

2. 授業設定の視点：コマづくりを通し、科学的思考と創造的知能を養う指導

3. 授業の題目：コマづくり

4. 題目について

理科教育においての知識は正確なものを児童に伝えなければならない。その点はおさえつつも、本校での理科教育は英才児のもっている創造性を活かし、結果や知識にたどり着くまでの予想の段階に重点をおき指導をおこなっている。今回の授業ではできるだけ長い時間まわり続けるコマづくりを行う。本校の第二学年で取り扱う、動くものづくり単元での投げ込み教材である。どのような形にすれば、どのように重さを調節すれば長く回すことができるかを考える。予想の段階で今までの学習と結び付け、その中で試行錯誤する力を養う。また、コマを実際に作っていく中で自分のコマと友達のコマを見比べながら、長く回るための条件に気づかせたい。

5. クラスの実態

本クラスの児童はどの課題にも興味を持ち活発に取り組んでいるが、特に実験や観察で対象と向き合う中で自問自答を繰り返し理解を深めていく児童が多い。また、一つの考えだけでなく、多様な考えを追求し、粘り強く取り組む姿勢が見られる。児童によって道具の使い方は若干の個人差が見られ、本時のコマづくりにおいても切ったり折り曲げたりといった丁寧さが求められる作業につまづくことが予想されるので、その点においては順次指導していきたい。

尚、本クラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）は下記の通りである。分布をみると大きな偏りは見られない。図形でとらえやすいような板書や言葉で投げかけるなどして、一人ひとりの考えをうまく引き出したい。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
137	141	133	137	132	141	133	141	138

6. 指導計画

コマづくり……1校時（本時）

7. 本時のねらい

コマづくりを通し，事象を比較して考えながら，創意工夫する力を養う。

8. 本時の指導過程

ねらい	学　習　指　導	指導の重点及び留意点
1. 課題の把握 課題1　できるだけ長い間回り続けるコマをつくろう	○限られた材料を用いできるだけ長い時間回り続けるコマをつくることを伝え、条件も説明する。 • 材料は工作用紙、つまようじ、セロテープ。 • 工作用紙は切ってつかってもよい。 • つまようじは加工できないこととする。	○テープをおもりとして使ってもよいということを説明し、重さのバランスを意識させる。
2. 結果の発表	○一斉にコマを回す。 ○なぜ長い間回ったコマの特徴を考える。長い間回ったコマと回らなかったコマを比較させ、どのような違いがあるかを考えさせる。	○作業の丁寧さや回し方だけでなく、工作用紙の形がどのようになっているかどうかに着目させる。 ○材料を多く用意し、たくさんの形を試せるようにする。 ○図形としてとらえられるようにコマを上から見た図として板書する。 ○概念としてとらえられるようにコマの特徴を言葉でも板書する。
3. 学習のまとめ 課題2　できるだけ長い間回り続けるコマをつくろう	長い時間回るコマの形を考え簡単な図で描かせる。	○中心を設定し、上から見た図を描かせる。

知能訓練指導案

9：20～10：20　於：のぞみ組教室

指導者　地　挽　裕　子
臼　田　愛　実

1. **クラス名**：のぞみ・はやてA組（3年生）
男子29名　女子5名　計34名　聖徳式（個人）平均IQ　161．4
2. **授業設定の視点**：ゲームを通して創造的知能の開発と育成を目指した指導
3. **教　　材**：『熟語ドミノゲーム』
4. **本時刺激される知能因子**：概念で関係を拡散思考する（DMR）
5. **本時のねらい**
カードを組み合わせて多くの熟語を作る事により概念で関係を拡散思考する能力を育てる。
6. **教材について**
世界的にポピュラーなゲームの1つにドミノゲームがある。28枚の長方形の札からなり、中央を区画し0～6の7つの数字を賽の目として、適宜に記した札を場に出された札と手持ちの札とを見比べて、同じ賽の目のところに並べていき、早く出し切った人が勝ちというゲームである。

本時に扱う「熟語ドミノゲーム」は上記のゲームの熟語（漢字）版である。漢字1つひとつには意味があり、その漢字同士をどう組み合わせるかによって熟語になり、できた熟語にさらにカードを組み合わせて三字熟語、四字熟語というように新たな熟語を作って発展させていくことができる。これが今回漢字を取り入れた点で「熟語ドミノゲーム」の大きな特徴である。

本時は1枚に2文字が記されているカードを使用するが、おのおの独立した漢字として捉える。ゲームを行う際には場に出ているカードと自分のカードと組み合わせて上下・左右に読んで熟語ができるかどうか考えていく。そしてカードを出していき、持ち札がなくなるまで順番にカードをつなげて出す。

スムーズにゲームを進めていく為には、全体をよく見渡しながらいろいろな熟語ができるようカードを出していかなければならない。更に高得点につなげていく為には、場に出されている熟語に自分のカードを組み合わせて三字熟語、四字熟語…というようにできないかと色々な角度から柔軟に熟語作りを思いつく事が必要になってくる。一人ひとりの漢字の知識量に多少差があることは考えられるが、それ以上に与えられた漢字を使い、いかに柔軟に組み合わせを色々と思いつくことができるかが、ゲームに勝つポイントになっていくだろう。

7. **クラスの実態と指導の観点**
本校の知能訓練では、3年生より能力別クラス編成を行っている。本クラスも年度始めに編成さ

れた。高能力児の集団は、その能力ぎりぎりの課題を与えないと集中力が整わないことがあり、また、自分の限界に挑戦することで子ども達の思考力を高めると、考えている。このクラスは興味関心が高く、反応が速い児童が多い。例えば、課題の説明や導入の段階で、素早くポイントを押さえた発言や質問をする事ができたり、「早くやりたい！」「どんどん先の問題に挑戦したい！」といった意欲的な姿勢が見られる。個々の「負けたくない」という意識が高いため、本時でもゲーム形式の課題ではどの児童も熱心に取り組み、白熱することが予想される。自己の思いつきだけでなく、友達の考えからも刺激を受け合いながら、活気ある授業になることを期待する。

《知能構造（クラス平均）のプロフィール》

	IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
平均	161.4	167.0	154.9	162.0	157.2	158.1	161.9	178.9	150.7

本時に刺激する「概念」と「拡散思考」の知能因子指数（FQ）は、他のFQと較べると若干高い指数を示している。拡散思考の素材としてゲーム形式を用いる中で、概念の課題にも楽しんで取り組み、柔軟に思考する力をさらに伸ばしていきたいと考えている。

8. 本時の指導過程

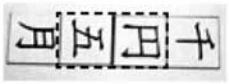
教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
1. 指導者の話を聞き、本時の内容を理解する。 (1) 次のカードを使って、どんな熟語ができるかを考える。 	• T 1：黒板に説明用ゲーム盤を提示し、わかり易く説明していく。 • T 2：机間巡視をしながら、子どもが説明に集中できているか確認する。 ◎ 間違った組み合わせ方の例 「水中」○ 「玉心」× • この時「分車」とはできないので、このようにはくっつけることができない。 ◎正しい組み合わせ方の例 ① ③ ② ① (空中) ② (学校生活) ③ (小動物) となる。

(2)

④

（学校）

⑤

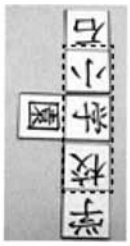


（五円）

• 上の熟語に一字加えて新たな熟語ができないかを考える。→三字熟語を考える。

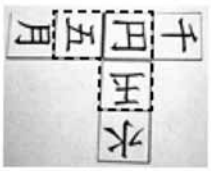
• T1：縦・横に置く読み方ができる事を伝える

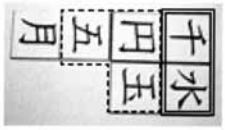
④



（小学校）

⑤正しい組み合わせ方・間違った組み合わせ方





（五円玉）

※『五円玉』はできているが、『千水』とはできないので×

《ゲームの進め方》

◎用意するもの
カード65枚
カード立て
ゲーム台紙
個別記録用紙

◎ルール
① 4人1組で行う。
② カードを6枚ずつ配り、1枚だけ場に広げ残りは山にして中央に伏せおく。
③ じゃんけんで順番を決め、勝った人から順番に、場に出ているカードと手持ちのカードとを組み合わせて、熟語ができるかどうか考え、作れた時にはカードを場に出していく。
④ できた熟語はその都度記録用紙に記入していく。
＊どうしてもできない場合には山札を1枚めくり熟語ができる場合には出す。

• T1：(1) で三字熟語ができた場合はいいが、そうでない場合は、二字熟語に一字加えれば三字熟語ができるものがある事に気付かせる。
• T1、T2：四字熟語も作れるが、ゲームを進めていく中で気付くようにさせる。

• T1：ゲームの目的をしっかり理解させる。

• T1：熟語ができない場所にカードを置けないことを確認する。
• T1、T2：どうしたら高得点になるような熟語が作れるか気づいていけるよう留意する。
{できるだけ多くの熟語を作る。
{字数の多い熟語を作る。
• T1：場にできている熟語にカード組み合わせて新たに熟語ができたときには自分の熟語になる事を伝える。

⑤ 次の人は同じようにして、他の人が作った熟語を含めて場に出ている全てのカードと手持ちのカードとを組み合わせて、熟語ができるかどうか考え、作れれば場に出していく。 ⑥ 手持ちのカードをすべて出し終わった人が出たら、その後一巡してケーム終了。 ⑦ 最後にできた熟語の得点を合計し、得点が一番多い人が勝ちとなる。	• T1：場にできている熟語にカード組み合わせて新たに熟語ができたときには自分の熟語になる事を伝える。
2. グループを作り、ゲームを行う。 • 実際にゲームに入る前に、どんなカードがあるのか を各自認知する。 ◎得点のつけ方 二字熟語…1点　三字熟語…3点 四字熟語…4点　五字以上…10点	• T1：ゲームを進めさせる。 • T1：できた熟語の文字数に応じて得点がもらえる事を確認する。 ④ 五円玉…3点 （五円玉） • T1、T2：各グループの進行状況を見ながら、ルールがきちんと理解されているかどうか確認する。 ＊T1、T2：「黒板」→「国板」など発音はあっていても違っている使い方に気を付けさせる。 • T1、T2：実態に応じて、指導・助言を行う。
3. ゲーム終了時にはグループごとに各自の点数を得点表に記入し、提出する。	• T1：得点が高かった子に、高得点につながった熟語としてどんなものを作ったか発表させる。
4. 終わりの挨拶をする。	• 終わりの挨拶をしっかりするように促す。

9. 評　価

授業後、本時を振り返り、児童一人ひとりの課題への取り組み反応（意欲・集中力・難易度）について指導者同士で確認をし、本時のねらいが達成できたかどうかを実践記録にまとめて、今後の実践に活かす。

知能訓練指導案

9：20～10：20　於：はやて組教室

指導者　富　永　理香子
高　橋　まり子

1. **クラス名**：のぞみ・はやてB組（3年生）
男子25名　女子9名　計34名　聖徳式（個人）平均IQ 128.9
2. **授業設定の視点**：言葉作りを通して創造的知能の開発を目指した指導
3. **教　　材**：クロスワードの思いつき～マス目にうまくはめ込もう～
4. **本時刺激される知能因子**：記号で転換を拡散思考する（DST）
5. **本時のねらい**

与えられた文字を使っていろいろな言葉を思いつき、マス目にクロスワードとしてはめ込んでいくことにより、記号で転換を拡散思考する力を育てる。

6. **教材について**

「記号で転換を拡散思考する」知能因子は、記号で変化することを柔軟に思いつく能力と解明されている。この知能因子の課題としては、与えられた文字を使い、言葉ができるような文字の組み合わせをいろいろと考え、できるだけ多くの言葉が作れるように考えていくものがある。

> **例題：**
> **“こ・い・た・し・あ”のうち何文字ずつか組み合わせて、言葉をたくさんつくりましょう。**
> **解答例：**
> **こい、いた、いし、こい、あした、あいこ、たいこ、したしい、たこあし…等**

言葉を思いつく遊びには、「しりとり」があるが、これは、例えば「あ」という文字から始まる言葉をたくさん思いつくことから派生した遊びである。知能因子でいうと、「記号で単位を拡散思考する」。どんどん思いつくというのは、自分の頭の中にあるものをアウトプットする初歩である。このアウトプットしていくという点で同じ形式の課題でも、考える条件をいくつも加えることで、対象が「単位」での思考を超えて、「転換力」を要求される課題になりうる。

こうしたことに着目して作成したのが、本教材である。制限された文字を使って、自分で思いついた言葉のつながりを考えながらマス目の中にはめ込むことで、固定された条件ではない変化が生じる。変化に対応することを考える時こそ、柔軟性が要求されるのである。そしてこの柔軟性は、創造的知能に欠かせないものである。

また、ここでいう「クロスワード」とは、一般にいう「クロスワードパズル」の略ではない。文字通り、一つの言葉で使われた文字と別の言葉で使われた文字の重なりを工夫して、言葉をつなげることである。私たちは、日頃知能訓練をするときの領域として、「図形」「記号」「概念」と分けて

刺激をしている。本教材は「記号」の領域だが、数記号を扱う時と違って言葉を扱う場合には概念的な興味・関心の有無にもかかわると考えられるので、幅広く取り組み易い。

得意なものが何であれ、興味を持って取りかかり易い上に、創造的知能との係わりも深い柔軟性を養うのに有効となれば、是非体験したくなる課題ではないだろうか。

7. クラスの実態と指導の観点

本クラスの児童のIQとFQ（知能因子指数）の平均は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
128.9	129.7	124.4	132.6	123.5	130.9	134.4	136.2	119.4

本校の知能訓練の授業では、3年次より能力別クラス編成をとっている。これは、知能訓練は、個々の発達段階にあった難易度の課題や授業展開で行われる程効果が高いという理由からである。能力差のあるクラスでの子どもたち相互の刺激ももちろん大切であるが、一つ一つの課題に丁寧に取りかかり、しっかりと理解してから徐々に段階を経て難問に挑戦していく方が、力を発揮できる子どもたちもいる。毎年、クラス分けをしたことによる効果が報告されている。本クラスの子どもたちも、これから、今まで以上に丁寧に課題に取り組み、大いに力を伸ばしてくれることと思う。

また、平均の表からは見えないこのクラスの特徴として、それぞれが、違った「領域」や「働き」において秀でたFQ（知能因子指数）を持っている点がある。授業では、いろいろな課題で児童が素晴らしい力を発揮し、クラス全体の課題への意欲を盛り立ててくれている。

本時の課題については、よりはっきりと活動内容を理解させて取り組ませることと、一つの見方にとらわれてしまって行き詰まった時には、解法への手立てを自分で気づいていけるような助言をすることを心がけていきたい。そのために、課題のステップを細かくし、時間を区切って集中的に思考する時間を取るように授業展開を工夫したい。また、本校の知能訓練の二人指導制の利点を活かし、個々の実態をしっかりと把握し、一人一人が楽しみながら、じっくりと考えていけるよう授業を進めていきたいと考えている。

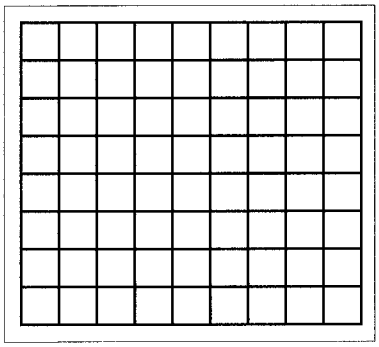
8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点等
1.〈課題1〉 与えられた文字を使って、2文字以上の言葉をたくさん考える。 は・さ・な・か・み・り	○文字をいろいろに組み合わせて、できるだけ多くの言葉を考えさせる。 ○〈考えていくときのルール〉を理解できているかどうか。

〈考えていくときのルール〉
- 同じ字を何回使ってもよい。
- 濁点や半濁点をつけて使ってもよい。
- 小さい文字にして使ってもよい。

Ｔ１：白板を使って、カードを提示しながら、説明し、活動内容を理解させる。机間巡視。
例：「かみ」「なみ」「はは」「みなみ」
Ｔ２：机間巡視。集中して説明が聞けているか、活動内容を理解できているかを確認する。

2. 〈課題２〉
〈課題１〉で作った言葉を、クロスワードの様にマス目にはめ込んでいく。



○作った言葉をマス目にはめ込んでいくことを伝え、実際に文字を入れて見せて理解を促す。
- 重なる文字に着目して縦横に組んでいくことを理解できているか。
- 縦の場合は上から下へ、横の場合は左から右に読んでいくことを踏まえて考えているか。

Ｔ１・Ｔ２：机間巡視をして、再度、活動内容を理解しているか確認する。

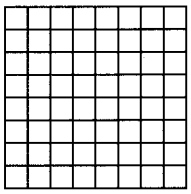
例

		か	か	り
は	さ	み		か
な		な	み	
		り		

3. 〈課題３〉
〈課題１〉〈課題２〉の要領で、個別課題に取り組む。

A

に・つ・い・よ・う・せ・ち・き



○これまでやった〈課題１〉〈課題２〉の手順で、個別の課題に取り組ませる。
○〈課題１〉のような言葉作りは、余白を利用して書かせる
○言葉のどんな所に着目して考えていくとよいのかを自分なりにつかんで取り組ませる。
- 文字の重なりを活かすことに気づいて取りかかれているか。

Ｔ１・Ｔ２：行き詰まっている児童には、３文字の言葉を縦横につなげる所から考えるように助言する。
また、どんどん思いついている児童には、さらに、言葉の組み方を工夫できるような言葉がけをする。

4. どんなクロスワード（言葉作り）を考えたかを発表する。	○言葉や言葉の組み方に特徴のある作品を取り上げ、友だちの作品のいい所に気づき、工夫した所や、言葉を考えたり組んでいく時のポイントについて確認しあう。
5. まとめ	○本時の内容についての児童の感想を聞き、課題内容が適切であったかの判断の資料とする。 • 楽しみながら試行錯誤できたか。 • それぞれが、取り組んだ結果に自信を持ち、今後に活かせる態度や思考のきっかけになったか。

9. 評　価

本時のねらいが達成できたかどうか分析し、児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について、指導者二人で実践記録にまとめて今後に活かす。

国語科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：くろしお組教室

指導者　内　藤　　茂

1. クラス名：くろしお組　（4年生）

男子19名　女子12名　計31名　聖徳式（個人）平均　IQ159.7

2. 授業設定の視点

低学年から高学年への変わり目、子ども達は自己主張が強くなるのに比例して盛んに言葉で言い返そうとしてくる。

「明日は学校がありません。」「へえ、学校がなくなるの？たいへんだ。」

「机を下げてください」「先生、椅子はどうするんですか？」

屁理屈による正当化、「ああ言えば、こう言う」、大人にとっては成長の証とはいえ、いわゆる生意気、やっかいな態度である。日常の中ではつい「余計なことは言わずに話を聞きなさい。」と押さえつけてしまいがちだが、これは相手を意識して「言葉で言い返す」言語操作性の成長過程であるともいえる。つまり、感情あるがまま、あるいは大人からしつけられた形式で言葉を発していた低学年の頃から、相手を意識した言葉の操作が盛んに行われる成長期といえることができる。もちろん言葉のしつけは大切であるが成長に伴い、相手の存在、相手との関係、距離、こういった人間関係が意識化されればされるほど言葉が変わってくる。その瞬間をとらえるきっかけの一つにしたい。

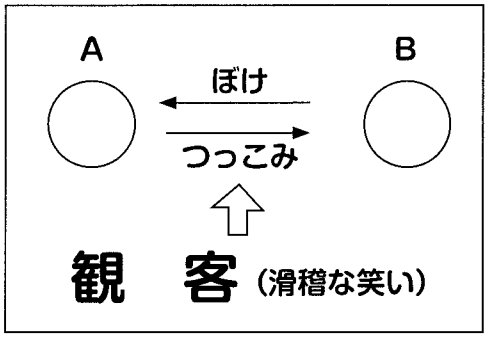
3. 教　　材：「ぼけ」と「つっこみ」

4. 目　　標：「ぼけ」と「つっこみ」の言葉のキャッチボールを通して、言葉の持つ影響力や言葉の裏にある意図を見抜いて反応できる。（用具言語および構え・拡散思考）

4. 主題（教材）設定の理由

①教材観

この時期の子ども達は、お笑いに見られる「ぼけ」と「つっこみ」といった軽妙なやり取りにとても興味を持ち、自分でも相手を選ばず言葉を操作しようとする。「ぼけ」とは意図的に相手の予想を裏切る会話であり、「つっこみ」とは相手の意図を的確に見抜き反応することである。お笑いの世界では観客という第三者がいて、会話（二人の関係）の滑稽さでウケをねらう。一方、日常会話での「ぼけ」と「つっこみ」は第三者（観客）のいない二人称（私とあなた）の関係であり、言葉の裏にある意図を「わかってもらいたい」、その意図を「受け取ったぞ」という人間関係を前提とした言葉のキャッチボールなのである。その意味で、言語操作性を養う授業（用具言語）でありながら、本校国



語科教育の柱である「思考」「感情」「構え」の3領域の中で「構え」にも大きく関わっている。

さらに知能教育の観点から言えば、瞬時の反応であるから「思考の流暢性」、すなわち拡散思考であり、（概念で関係を拡散思考する）となる。

②児童観（クラスの実態）

4月から初めて持ったクラスであるが、学年担任であるためか子どもがなじむのが早かった。

本校は、1年生から教科担任制をとっているために、授業で教員が変わる度に学習姿勢が変わってしまう、という問題も起きやすくなる。また、学習のルールを守れず「思ったことを大声で言ってしまう子」の存在も課題になっている。幼児期から個別学習で力を発揮する子は集団の中で自己主張を繰り返すか、逆に言葉による自己表現を苦手とする子に際立って分かれる傾向がある。

「相手を現実的に認識すれば言葉は変わる」という仮説のもとに立てば、ただ単に学習のしつけとして押さえつけたり枠にはめるのではなく、国語という教科を通して、相手の存在を意識した、あるいは言葉の影響力を考え言葉を駆使することができる成長を援助する両面のバランスが大切であると考えている。

○4年くろしお組　知能プロフィール

知能指数	図　形	記　号	概　念	認　知	記　憶	拡　散	集　中	評　価
159.7	164.8	151.3	163.2	158.3	160.2	154.3	175.5	149.8

③指導観

「言語操作性」の授業では、じっくり考えて答えを出す（集中思考）のではなく、次々と思いつく思考の流暢性（拡散思考）が大切である。しかし、テンポや思いつきを重視すると、まだまだ感情が先走った言い合いになったり、意味のない言葉の応酬になったりすることが多い。「言い方によって言葉の効き目が違う」ということを押さえつつ、授業ではルールにのっとって進めていきたい。ルールは、

- 「言葉の効き目」（相手がどううけとめるか）を常に意識する
- けっして感情にながされない
- 会話の楽しさが心に残るような遊び心を持つ

本授業の教材は、日常の子ども達の会話の中から拾っていく。

教員「今日は暑かったねえ。何℃ぐらいあったかなあ。」

すかさず子ども、

子ども「こりゃ、80℃だな。」（死んじゃうだろうが‥）

子ども達は気が付かないうちに、日常的に会話の中で言葉の操作を行っている。そこを生かして意識化させることが有効ではないかと考えている。

5. 指導計画

1. 言葉による受け止める感情の違い（からかい、皮肉、おべっか、冗談‥）
2. 「ぼけ」と「つっこみ」　言葉の裏の意図は何か（本時）
3. 日常会話で「ぼけ」と「つっこみ」を探す

くろしお組（4年生）

6. 本時の目標

「ぼけ」と「つっこみ」双方の言葉の裏にある意図を読み取り、会話を作ってみる

7. 本時の指導展開

ねらい	学習過程	指導の重点および留意点
	○学習開始の挨拶 ○素　読（『太平記』ほか）	
○「ぼけ」に対する反応の仕方を考える	○教員「今日は暑いね。何℃ぐらいあったかねえ」 生徒「こりゃ、80℃だな」 教員「(　　)」 (　　)を考え発表し、その時の教員の気持ちを考える。	○実際に子ども達が話していたことを「言葉のスナップ」として教材にする。
○「ぼけ」と「つっこみ」の対応	○係員「入場料は50円です」 ぼけ「(　　)」 係員「そんなばかな！」 (　　)を考え発表し、おもしろいぼけはどれか検討する	○クラスの中でどんどん発言できる子と、考え込んでしまう子の差を配慮し授業を組み立てていく。
○「ぼけ」の意図を読み取り反応する	○「ぼけ」のタイプを整理して提示し、どんな「つっこみ」になるか反応を確認する。 ① ダジャレなどの言葉遊び ② 大げさな言い回し 「まさか」「ありえない」 ③ 相手の期待を裏切る反応 「そっちかよ」「なんでだよ」 ④ わざとタイミングを外す 「違うだろ」 ⑤ わざと本題をそらす（スカシ） 「どっちだよ」	○ルールの確認 • 言葉の効き目を考える • 感情に流されない • 遊び心を持つ ○「言い返す」ことが嫌味や皮肉の応酬にならないようにルールの徹底を行う。 ○的確な「つっこみ」は、相手の意図を汲み取らないと会話は続かない事を意識させたい。
○「つっこみ」から「ぼけ」を見つける（考える）	○今度は「つっこみ」の言葉をカードとして提示し、どんな「ぼけ」が考えられるか発表する。 ○学習終了の挨拶	○次回までの課題『日常会話の中で「ぼけ」と「つっこみ」を見つけて（考えて）みよう』へつなげていく。

8. 評　価

「ぼけ」と「つっこみ」の関係（構造）を理解し、日常会話の中で見つけられるようになったか？

地理科学習指導案

9：20～10：20　於：はやぶさ組教室

指導者　**松　﨑　昭　彦**

1. クラス名：はやぶさ組（4年生）

男子21名　女子11名　計32名　聖徳式（個人）平均IQ：156.4

2. 授業設定の視点：創造的知能の開発と育成を目指した学習指導

3. 授業の題目：地形図の中の視点で、見える景色をイメージする。

4. 題目について

本校地理科の基本的な考え方は、創立当初の次の文章に示されている。

『現在の小学校における地図学習は、社会科の中で行われ、「近所のくらし」などから始まっている。絵地図に発展し、山に登って展望するといったことから、地図の概念に導入しようとしている。英才児の場合、こうしたまわりくどい方法は、ほとんど必要がない。たとえ多少必要があったとしても、それは極めて短時間で習得するであろう。したがって、英才児を対象とした地図学習は、地図プロパーの学習として進めたいと思う。アメリカの調査などによっても、英才児は地図に対して異常な興味を示すものである。これは英才教室でもあり、3・4歳頃からよろこんで地図に取り組んでいる。そんなわけなので、英才小学校では、社会科を地理と歴史に分けて行い、地理の場合は、とりあえず地図学習に中心点を置いているのである。地図というのは、(1) 凸凹のある地球表面を仮想の球面上に投影し、次に (2) この仮想の球面を平面に置き換え、さらに (3) この表面を適宜に縮小したものである。そして、そのためにいろいろな約束や記号が用いられて、地図表現が生まれることになる。このような約束や記号を理解することによって、地図を見るものは平面的な地図から立体的な空間事象を見通すことができる。そこに等高線とか縮尺とかいう問題が横たわり、英才児のたいへん面白い課題となる。』（昭和44年11月20日発行「英才教育の道」55頁～56頁、横浜国立大学教授、同附属小学校校長（当時）野村正七氏の文章より）

このように、本校地理科のカリキュラムは地図学習を中心にして組まれており、3年生で地図記号をはじめとして地図の基本的な見方を学習し、4年生では実際に国土地理院発行の二万五千分の一地形図を使って、学校周辺あるいは林間学校で行く志賀高原の地形について学んでいく。

本時の主題は、志賀高原の地形図を見て、等高線を読み取りながら、地図の中の一点にいる自分の視点でまわりの様子をイメージすることである。地図を見ている自分の視点とは別に、地図の中に入り込んだ自分の視点も持つことで、地図の読み取りをより深いものにさせたいと考えている。

5. クラスの実態

地理に対する興味関心は総じて高く、楽しみながら学習に取り組めている。積極的に挙手して意見を言える子どももいるが、じっくり考えながら自分の考えをまとめていく子どもも多い。

―― はやぶさ組（4年生）

本クラスのIQとFQ（知能因子指数）の平均を見ると、集中思考の値が高いことがわかる。地形図をじっくりと眺め、その中に入った自分の視点でまわりの様子をしっかりととらえることに大きな期待が持てる。さらに見える風景を自由にイメージすることで、拡散思考も刺激できれば、と考えている。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
156.4	165.3	151.9	152.2	156.7	153.9	151.4	172.3	147.9

6. 指導計画（2時間扱い）

二万五千分の一地形図……8校時中本時は6校時め

7. 本時のねらい

地形図から等高線を読み取り、地図の中の自分の視点で風景をイメージする。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
1. 前時の振り返りをしながら、自分のイメージを確かめさせる。	○前時に描（書）いた「志賀山から見える景色」を発表する。	○前時の作品をスクリーンに映す。 ○友達がイメージしたものを見て（聞いて）、自分のイメージと似ている部分や違う部分を確認させる。
予想されるイメージ（言葉によるもの） • 南を見ると、目の前に鉢山が左右対称のきれいな姿を見せています。 • 東の方角から少し北に目を移すと、森に囲まれた大沼池があり、小さく鳥居も見えます。 • 北西にはいくつかの池の向こうに山が見えます。去年登った旭山だと思います。 など		
2. 上記のそれぞれについて、その情景をイメージさせる。	○友達の発表について、「本当に見えるか」「どのように見えるか」などを考える。 ○個人あるいは班の意見を発表する。	○隣り同士、あるいは班での話し合いも取り入れる。

リーダー・イン・ミー学習指導案

9：20～10：20　於：はまかぜ組教室

指導者　**渡　邊　孝　典**

1. クラス名：はまかぜ組（5年生）

男子23名　女子10名　計33名　聖徳式（個人）平均IQ171.2

2. 授業設定の視点：創造性豊かに伝え合い、対話を通し深い学びを目指す指導

3. 授業の題目：『ぼくも幸せ・○○も幸せ』

15秒ＣＭ創作発表

～“win -win”の関係を見つめて～

4. 題目について

本校では昨年度より道徳教育の一貫として、『リーダーインミー』を導入し、本校独自の“心の教育”のあり方を考察し、研究を進めている。 近い将来社会で貢献するための力を心身共に育み、“7つの習慣”が人格形成の礎となることを目指す。

今回の授業では“第4の習慣”「win-winを考える」という単元を扱う。他者や相手の考えも受容し、お互いが“幸せ”だと感じられる場面はどんな時かと考えさせたい。『ぼくも幸せ・○○も幸せ』と題した15秒でのＣＭづくりを通して、「幸せってなんだろう？」という哲学的なテーマを自らすすんで考察し、他者に思いや気持ちを的確に表現する力（＝コミュニケーション力）も同時に養っていく。

5. クラスの実態

【学びをつなぐ】を学級目標に、他者との“つながり”を大切にし、互いを高め合い、支え合える学級を目指し、高学年として新たな学校生活をスタートした。

意見や論点を整理し主張できる子は多く、クラスの活動での“話し合い”では、「こうだったらこうしたらいいんじゃない。」と様々な角度から論理的に議論ができる。あまり自らの考えを発表したがらない子もいるが、「意見を言うことがすべてではない」と位置づけ、“聴く”ことによる学習も大切にしてきている。間違えることを恥ずかしがらない雰囲気（＝安心感）がこれまで持たれた担任の先生の指導により、醸成され、今も生かされている。

尚、本クラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
171.2	177.1	166.8	169.5	179.4	179.7	156.9	177.5	162.4

はまかぜ組（5年生）

6. 指導計画

- 第4の習慣「win-winを考える」
  「幸せって何だろう？　どんな時に幸せ？」(サークル対話) (1/3)
- 『ぼくも幸せ・○○も幸せ』ＣＭづくり　グループ討議・準備 (2/3)
- 『ぼくも幸せ・○○も幸せ』ＣＭ　創作発表（グループ発表）
  「幸せってなんだろう？（再考察)」(サークル対話) (3/3　本時)

7. 本時のねらい

- 自分たちの思いや考えを自信をもってＣＭで伝え、また様々な発表を通し自分自身の心と向き合い、新たな価値（“win-win”）とその多様性を知る。
- このＣＭ創作自体が“win-win”（自分の考えと他者の考えとの互恵性）の関係であることに気付かせ、体験と思考をつなぎ、豊かな心情を育てる。

8. 本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点及び留意点
	◇ これまでの学習を想起し、発表に向けての 心を整える。	
(1) 自分自身が考えてきた“幸せ”を、自信をもって表現する。	◇ 発表を行う。 『ぼくも幸せ・○○も幸せ』 ～ win-win の関係を見つめて～ 15秒ＣＭ　創作発表 3人1グループ　全11グループ	• 温かい心で、他のグループの発表を聴くよう、見る側の“構え”を整えさせる。 • 自分だけが幸せと感じるときと自分も他者も幸せと感じる“win-win”とのちがいを見つめさせる。
(2) 他者の発表を通し、自己の価値観との相違を見つめ、多様性を受容する心を養う。	◇ サークルでの対話を行う。 1.「発表を終えて。」(感想や意見) 2.「“幸せ”ってなんだろう？」 ◇ 学習感想　ワークシートに記入。	• 前々時の学習感想をもとに、対話を深めていく。 • ＣＭ創作を経て、感じられた心境や価値観の変化を、感想に記入するようにさせる。

英語科学習指導案

9：20～10：20　於：わかしお組教室

指導者　**渡　辺　泰　介**

1. クラス名：わかしおA組（5年生）

男子　11名　女子　5名　計16名　聖徳式（個人）平均IQ 181.0

A・Bクラスは、能力別クラス編成

2. 授業設定の視点

一人ひとりの個性や興味・関心・能力に応じた英語教育

英語を聴いて理解する、主体的に発話していくといった点、単語や文を書くという点でも個人差がある。それぞれの子のペースをしっかりと把握し、全体的なレベルアップを図っていきたい。

3. 授業のテーマ：Wild Animals around the world（世界の野生動物について学ぶ）

4. テーマについて

本校では1、2年生が週1時間、3、4年生が週2時間、5、6年生が週3時間の英語の授業を行なっている。5、6年生においては、週3時間のうち1時間を外国人、2時間を日本人が担当している。学習内容は、相互にリンクしているが、6年生の3学期に「スピーチ・コンテスト」と銘打って、卒業課題として自分の関心事について保護者や後輩の前で表現ができることを学習面での一つのゴールに設定して授業に取り組んでいる。そのため、テーマごとにある程度決まったフレーズを暗誦させるような活動も積極的に取り入れている。

日本人の授業ではテーマに沿ったフレーズや語彙の学習がメインであるのに対して、外国人の授業では対話やスピーチが中心となって展開される。5年生1学期前半は"The world where we live"（私たちの住む世界）というテーマで、絵本を中心にいくつかの国や大陸について学習してきた。さらにlike to～というフレーズにも慣れ、付随する語彙や動詞を学習してきた。また、ネイティヴの授業では、動物の特徴や性格などを、ネイティヴ・スピーカーの特性を生かして、ジェスチャーやゲームなどのアクティヴィティを交えながら導入してきた。

5年生1学期後半は、"Let's take care of the Earth"という絵本を使いながら、世界の野生動物の中からいくつかをピックアップし、その特徴や生息地などについて学習する。文法事項としてはI can～　というフレーズが中心となるが、the biggestなどの最上級表現にもここで触れる。

6年生に向けて、今回は外国人の授業で扱っている"Guess what I am"という簡単なスピーチも後半に取り組ませたいと考えている。Aクラスということもあり、これまで学習してきた内容を使い、自分なりの表現ができるかどうかを見ていきたい。また、時間があれば今年度から授業内で取り組んでいる英語検定に向けた単語の反復練習（CDを使用）も行ないたい。語彙を増やすことや、聞き取りに慣れることは、検定試験だけでなく語学学習には有効であると考える。

わかしおA組（5年生）

5. クラスの実態

この4月から能力別になったクラスである。加えてホームルームもクラス替えとなり、新たにスタートした。Aクラスということで、英語に対する興味関心は高い児童が多く、リスニングに対する反応も鋭い。発言という面では個人差があるが、知っている英語を使ってみようとする意識は高い。外国人の授業をとても楽しみにしていて、ネイティヴの先生との会話にも意欲的である。

今後は、この反応の良さを生かして、より主体的に発話できるように刺激していきたいと考えている。

6. 目　標

① 歌を通して、英語のリズムに慣れる。

② 野生動物に関する英語表現に慣れる。

③ ゲームやスピーチ練習などを通して、理解と定着を図る。

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
ウォームアップ	• あいさつをする。 • 歌を歌う。 • 英語の質問に答える。	• 気持ちが授業に向いているか。 • 声が出ているか。 • 的確に返答しているか。
前時までの復習	• テキスト（絵本）を読み、質問に答える。	• 内容の理解は十分か。 • 声は大きくでているか。
本時の学習	• 野生動物を表す表現を理解する。 • ゲームを通して表現を身につける。	• ルールの徹底。 • 教師、友達両方の英語をしっかりと聴く姿勢。 • 楽しみながら、内容を理解しているか。
まとめ	• まとめとして、ミニスピーチに挑戦させる。 • まとめのプリントで整理する。	• 声の大きさは適当か。 • 表現の方法に工夫はあるか。 • 聴く、書くことに取り組めているか。

英語科学習指導案

9：20 ～ 10：20　於：あずさ組教室

指導者　藤　石　勝　巳

1. クラス名：わかしおＢ組（5年生）

男子　12名　女子　6名　計18名　聖徳式（個人）平均 IQ 162.4

2. 授業設定の視点

一人ひとりの個性や興味・関心・能力に応じた英語教育

個々の子どもたちは意欲的に授業でも取り組めている。語学の学習においては特に、人前で声を出すことを恥ずかしがらず、お互いを認め合って、他の子どもから学ぶことの大切さを意識させていければと思っている。

3. 授業の題目："Wild Animals"（世界の野生動物を学ぶ）

4. 題目について

聖徳学園では昨年度から英語の授業を１年生から行なっている。ただこのクラスは３年生から英語を学習している学年なので今年が英語学習３年目である。低学年では主に英語の音に慣れることを目標としている。そのため子どもたちの身近にある「教室にあるもの」、「動物」、「家の中にあるもの」、「町の中にあるもの」、「職業」、「乗り物」などの語彙を英語で紹介し、日本語にはない英語の音に慣れさせていく。また多くの英語の音を通して、体を動かしながら自然に英語のリズムやイントネーションが身につくようにしている。そして英語の文字の基本となるアルファベットの大文字、小文字を練習し、さらには文字と発音の関係を知る基礎となるフォニックスアルファベットを身につけることで、その後の英語の文字や文の読みに発展させていく。４年生では、低学年で身につけた基礎をもとにして、聞く英語から少しずつ自分について話す英語へと広げていく。「自分の年齢」、「住んでいる所」、「好きな食べ物、動物、スポーツ、色」、「何時に起きるか」、「どうやって学校に来るか」などの質問に答えられるように練習する。また文字についても少しずつ単語レベルの読みから文を読むレベルへと発展させていく。５年生になると、絵本やテーマに基づいた英語学習が中心となる。そして６年生ではさらにテーマを広げ、「水の循環」、「太陽系」、「世界遺産」など、英語を通して環境問題などにも目を向けさせたいと思っている。

今回扱うテーマは「世界の野生動物」である。3、４年生の時に既に一般的な動物については学習してきた。その内容をさらに発展させ、環境によって生息する動物が異なることを知り、結果的には自然の大切さを子どもたちが再認識することができればと願っている。

5. クラスの実態

５年生はこの学年から能力別クラス編成を行なっている。１クラスをＡとＢの能力別に２グループに分け、週の３時間の英語の授業のうち、２時間は日本人の英語の教員が指導し、１時間をネイティブの外国人教師と日本人教師のティームティーチングを行なっている。本時のこのＢクラス

は日本人教師のみの授業となる。

このクラスはまだ4月にクラス替えがあったばかりで、また英語の担当教員も変わったので、子どもたちも教員も新鮮な気持ちでこの二ヶ月間頑張ってきている。素直な子どもたちで、熱心に英語を発音し、一生懸命取り組んでいる子どもたちである。ただその元気な取り組みを大切にしながらも、コミュニケーションで大切な「しっかり相手の話も聞く」、「お互いから学ぶ」ということにも留意しながら指導していきたい。

6. 目　　標

① 世界の野生動物を表す表現やその生息場所について英語で知る。

② 様々なゲームや活動を通して、英語の楽しさを知る。

7. 本時の指導過程

ね　ら　い	学　習　活　動	指導の重点および留意点
あいさつ	1　黒板の日付等をノートに写す 2　挨拶をする 3　歌を歌う	• 線の上に丁寧に書いてあるか • 大きな声で、正しく発音されているか
前時までの復習	4　動物の特徴や生息地の英語の表現 5　簡単なゲーム	• しっかり聞き取れているか • 正確に発音できているか
本時の活動	6　新たな動物やその特徴などを紹介する 7　ゲームや活動を通した練習 8　プリントなどを使ったまとめ	• 既習の内容と関連させて • 声が出ているか • 友達の発言に耳を傾けているか
まとめ	9　歌とあいさつ	

理科学習指導案

9：20～10：20　於：理科実験室

指導者　三　輪　広　明

1. クラス名：あずさ組（6年生）

男子20名　女子11名　計31名　聖徳式（個人）平均IQ168.7

2. 授業設定の視点：実験の計画立案を通し問題解決の能力を養う指導

～沸点上昇を起こす要因を探る～

3. 授業の題目：水溶液の沸点

4. 題目について

物質が沸騰する現象は、4年次に水を中心とした、純物質について学習してきている。沸騰する温度が、物質固有のものであることに触れてきた。ここでは、沸騰を物質の内部から気体が生ずる現象としてとらえるにとどまっている。この点を、蒸気圧との関連で捉えさせる手立てとして、水溶液による、沸点上昇を考察してみてはどうかと考えた。つまり、沸騰を蒸気圧が1気圧に達し生じる現象ととらえさせるものである。物質表面から蒸発していく水と、空気中から水中へと戻っていく分子が、等しい時に沸騰をする。溶質が溶け込んでいる状態では、境界面での水分子の飛び出しが少なくなり、蒸気圧が純粋な水の時に比べ低くなってしまう。このため、沸点が高くなる。

本題目の中では、この沸点の上昇する現象が何によって引き起こされるのか、各自の関心を基に、予想を立て、その検証のための実験を班ごとで計画し、探求させようというものである。ここ数年進めてきているこども達の意欲を喚起するために、実験方法を考えさせる活動の場として設定した。

これまでにも、こども達が実験の方法を自ら考えることは様々な場面で行ってきた。たとえば、5年次の、植物の発芽の条件の実験、6年次では、混合物から純粋な食塩を取り出す実験などが挙げられる。これらの実験は、班ごとで実験方法を考えさせ行った。いずれの場合も、こども達の意欲は高くなり、時にはこちらの予想できなかった実験を試みることもあった。また、毛細管現象の探求においてその成果が感じられた。

本題目では、「沸点上昇」を題材とし、こども達自身が実験方法を計画する授業を設定した。ここでは、沸点の上昇が大きくなったり、小さくなったりする要因としてどのようなことが考えられるのか予想する。そして、そのことを検証するために、どのような実験をすればよいのか考えさせる。要因を見出すことがその押さえたい内容ではなく、探究していく活動そのことを学習の目標と定めた。この探究活動こそ創造的知能を活用するよい学習の場であると考えるからである。

5. クラスの実態

理科の学習への意欲が高いクラスである。特に、実験や観察を通した学習では、自らの手で調べていこうとする面が強く出ている。現象の背後にある要因を見出していく点でも、様々な事象と結

び付けて考えていこうとする傾向がみられる。とらわれない自由な発想が普段の授業の中からも見られることである。時に考えすぎともとれるようなこだわりも出てくる。それは、現象との相関度の強弱を考える場ともなっている。一歩深めてとらえる好機となっている。これらの個々の関心が、授業を動かしていく力となっている。

知識の定着という点で個人差はあるが、実験を通した学習においては、理解が確実になるという面も見られるところである。今回このようにして、実験を進めていくことは、両者の学習をそれぞれの段階で進めていく力となっていくと考えられる。

なお，本クラスの平均IQとFQは以下のとおりである。他の因子と比べ、様々な物事を推理する集中思考力が高い点がクラスの特徴として表れている。本題材の学習で発揮される力と期待される。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
168.7	180.6	162.2	163.2	174.1	173.5	159.3	173.1	163.5

6. 指導計画

(1) 食塩水の沸点の測定……1校時

(2) 実験の計画を立て、実験を行い、予想したことを検証する。……2校時（本時2校時目）

7. 本時のねらい

各班で計画した実験を行い、沸点上昇の要因がどのようなことであるのか検証する。

8. 本時の指導過程

ねらい	学　習　活　動	指導の重点及び留意点
1．課題の把握 課題1　さらに、水の沸点を高くするためには、どうすればいいだろうか？	○班ごとで立てた実験の計画を確認する。 ○班ごとで役割を決め実験を進める。 ○実験の結果から、沸点上昇を大きくする要因であったのかどうか考える。 ○結果の意味を考えさせる。	○こども達の調べたい要因をどう実験として組み立てていけるか。 ○条件を整え、比較実験となるように実験を計画させる。 ○班の全員が実験に関われたか。 ○安全に心を配りながら実験を進めることができたか。 ○ガラス器具の破損への対応。
2．結果の発表 課題2　どのような液体の時に沸点上昇が大きくなるのか。		○実験の結果を踏まえ、沸点の上昇につながる要因を考察していく。 ○沸点が下がってしまったことがあっても、そのことを基に沸点上昇の要因を探っていく。

3．学習のまとめ		○沸点上昇を分子のモデルから考えさせる。

歴史科学習指導案

9：20～10：20　於：やくも組教室

指導者　**由　里　敏　夫**

1. クラス名：やくも組（6年生）

男子21名　女子10名　計31名　聖徳式（個人）IQ170.5

2. 授業設定の視点：

先人の知恵や取り組みを学び、創造的知能の活用を目指す。

3. 主　　題：日本通史（災害と人々の知恵）……「江戸時代の自然災害」

4. 主題について

2011年3月11日に発生した「東日本大震災」は、その規模がマグニチュード9・0という、日本の歴史上最大の地震だった。

自然災害はこれまでも数多く起こっている。しかし、過去の記録が資料として詳しく残されているわけではない。一方、人々の記憶に残り、伝承として代々後世の人々に語り継がれていたりするのである。

「温故知新」という言葉がある。「故（ふる）きを温（たず）ねて、新しきを知る」と読む。「昔に起きたことを研究して、そこから新しい知識や道理を見つけ出す」ということだ。

歴史をなぜ学習するのかと言えば、この温故知新が目的の本筋を捉えているのだろう。

今回は、江戸時代に起こった災害を取り上げて、そこから見えてくる課題や反省点、当時の人々の知恵を借りることで、今後に生かしていけるような取り組みをしたいと思う。

本時は、江戸時代の自然災害を三つのパターンから検証する。

㋐、寛保2年（1742）、天明6年（1786）等の関東地方で起こった大洪水。これは新田開発に伴う護岸工事が行われ多くの田畑が作られた。しかし、この開発は良いことづくめではなかった。開発の手は山地にも及び、都市計画にともなう木材需要の高まりが乱伐を招いた。このような森林開発は急な流れが特徴の日本の河川にあって、森林破壊は洪水の原因となり、家屋を押し流し、田畑には土砂が入り、大きな被害を招いた。

㋑、安政元年（1854）東海地震（M8.4）が発生し、その32時間後に南海地震が発生し津波が襲った。両地震による死者の合計は約3万人、余震とみられる地震は9年間で2,979回と記録されている。だが、この震災で津波に襲われながら多くの村人を救った話が伝えられている。

㋒、天明3年（1783）浅間山大噴火、被害は55か村、流死人1624人、流失家屋1151戸、泥入田畑5055石を出した。浅間山は4月4日、5月26日、6月18日と間隔をおいて噴火し7月6～8日頃にピークを迎え、大規模な火砕流が発生した。鎌原村では7月8日午前10時ごろ火砕流が発生した。村を一瞬のうちに埋没させたエネルギーは想像を絶するものであった。その後の村の復興や救済活動は迅速で地域のつながりの中で進められた。

上記の三つの自然災害を見ると、それぞれの課題や教訓が見えてくる。㋐は洪水という自然が起こした災害ではあるが、行政活動がその原因の一つになったことを指摘することができる。㋑の大地震は大きな被害を出し津波による犠牲も多かったが、これを防いだ人々がいたことも後世に伝えられている。㋒の火山の噴火では多くの命が一瞬のうちに奪われたが、一方で、避難して助かった人もいる。また、その後の復興活動には見習うべき活動もある。

このように三つの事例からも、それまでの災害を教訓として生かすことができるのである。

そして、現代人が学ぶべきものが沢山見えてくる。

本校の歴史は四年生から始まり、語りを中心とした学習として取り組む。初めは「平家物語」等を使い、昔話としての物語性を養いながら、場面をイメージする活動を行う。次の人物伝では人物の生い立ちを中心に扱い「釈迦」から「徳川家康」までの2千年を何人かの人物でイメージさせる。また、5年生では、人物の行動に着目し、それがどのような考えを元に導きだされていったのか当時の社会情勢を踏まえながら考えさせる。5年生の2学期からは日本通史を扱い、これまでに養った力で、日本の過去から現在までを紐解いていく。このように、どの学年においても中心的な学習は、時代を語りの中でイメージさせ人物を通して社会を考えさせていく。このような学習の中で培った想像力で、今回は資料を基にしながら、場面を想像し人々の行動を見つめていく。

5. クラスの実態について

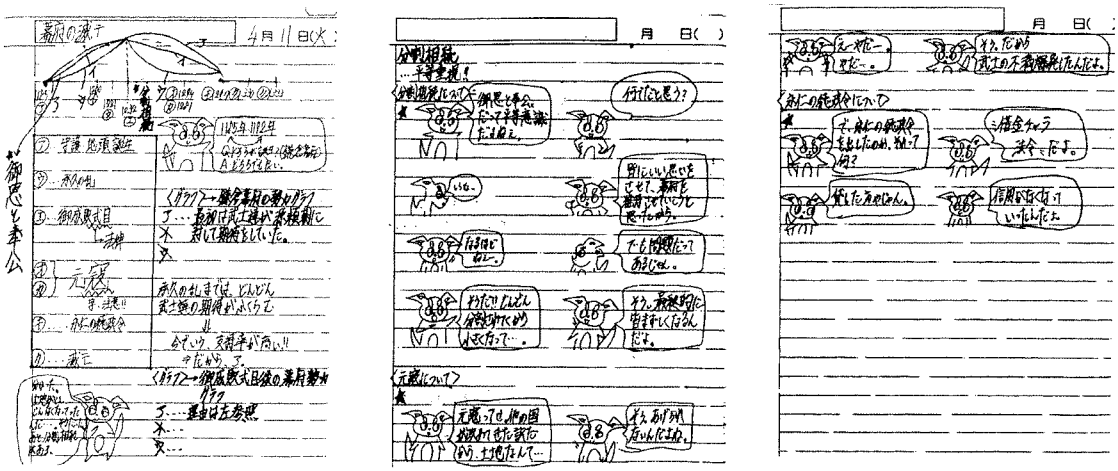
歴史は興味の差が大きい教科であるが、本校の四年生から始まる歴史学習は「歴史好き」の児童を多く作り出している。これは今年のクラスも同様である。

四年生では、人物の少年期を中心に扱うことで、時間の概念をあまり意識せずに一人の人物の生き方を学ぶ。歴史上の人物を自らと比べることで、同じ人間としての考えに気付くことが出来る。そして、五年生では、更に時代を意識させ、立場の違いから対立する人物の生きざまを考える。このような取り組みの中で、歴史学習を記憶するだけの学習と捉えることはなく、歴史上の人物から学ぶ構えが作られる。だから、時代や社会制度は違っていてもそこで生活する人々を想像できる。自分ならこう考えるという意見を持ち、また、この時代だから「こういう考え方もある」というような思いが生まれてくるのである。今回自然災害を扱うのも、過去に起こった事実としての取り組みに留まるならばあまり意味がない。しかし、本校の歴史を学んだ児童は、先人の課題や成功を追体験することで、次に向けての構えを育てるのである。

このような歴史学習の成果は、子供たちが綴る学習ノートからも分かる。

――― やくも組（6年生）―――

下記は、4月の最初に扱った『鎌倉幕府の滅亡』の時のノートで、45分間一校時で書かれたものである。



上記は、枚数としては3ページ、授業時間の中で作成された。

記述は板書内容を書き写した部分は少なく、授業の内容を自らで解釈し、この時の考え方を自分が作ったキャラクターで表現している。

この紙面を見ると、こちらが捉えさせたい内容がほとんど網羅されていて、これに自分流のアレンジを加えて楽しみながらまとめている。

本校の歴史科ノートは、記録として留めるだけのものではない。自分の疑問や感想、意見など、自らの考えをまとめるためにそれぞれが工夫して書き上げたものである。

知能構造のプロフィール－クラス平均

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
170.5	176.5	166.8	168.4	174.9	176.8	160.4	176.5	163.9

6. 目　　標

江戸時代の災害から見えてくる現代人が学ぶべきものを考える

7. 指導計画

- 大名配置・武家諸法度……45分×2
- 大名統制……45分×2
- 身分制度……45分
- 鎖国……45分
- 経済の発展……45分×3
- 江戸時代の自然災害……60分×1（本時）
- 三大改革……45分×1

• ペリー来航……45分×1

8. 本時のねらい：江戸時代の自然災害から見えて課題や知恵を理解し、現代に生かせる教訓とする。

9. 本時の指導過程

ねらい	学習内容	指導の重点及留意点
	開始の挨拶	
1. 導入	1.「てんでんこ」について問う。	• 東北地方の人々が災害に対する構えとして言い伝えられた合言葉。釜石の小中学校の話をもとに本日のテーマを伝える。
2. それぞれの災害の特徴を読み取る	2. 江戸時代の自然災害 • 巨大自然災害250年→33回 ㋐ 寛保2年（1742）江戸大洪水 ㋑ 安政元年（1854）南海地震・津波 ㋒ 天明3年（1783）浅間山大噴火を詳細を説明する。	• 資料を提示する。（絵・文書） ① 災害の経緯 ② 被害状況（被災者・被災家屋） ③ 被災後の対応等 • 児童にも同じ資料を配布して、気になるところに、自ら気付けるようにする。
3. 課題を探す	3. 資料から分かる課題を見つけ出す。	• 児童の視点を重視する。 出てきた意見を分類する中で、個人や国の立場に分けて、視点を整理する。
4. 教訓	㋐ 寛保2年（1742）江戸洪水 • 新田開発→河川の氾濫 ㋑ 安政元年（1854）南海地震・津波 • 予測できない災害→伝承を元に避難 ㋒ 天明3年（1783）浅間山の大噴火 • 余震→生かされなかった • 災害後の対応について等	• 資料は意図を含んでいるが、押し付けにならないようにしたい。 • 視点の分類 ↓ 課題を見つける（原因を探る） ↓ 次に繋がる
5. まとめ	4. 現代に生かすために 終了の挨拶	

全　体　会

10：30 ～ 11：40　　於：講　堂

1．あ い さ つ　「英才教育の成果報告」

園長・校長　**和田　知之**

2．園児･児童発表　5 歳児　歌　唱

4 年生　合　唱

3．研 究 発 表　「本校の自由研究にみられる児童の個性・創造性」

児童会担当・数学科主任　**米持　勇**

平成29年度の研究活動計画

研究部の活動計画

1. 研究テーマについて

昨年まで『英才児の創造的知能の開発と育成』というテーマで研究を進めてきた。“創造性”については「創造的思考」「創造的技能」「創造的態度」の３つの側面からとらえ、これまで、23年にわたり、研究授業を行い、また中間テストや期末テスト、児童の作品なども通して創造的知能とは何かについて議論を行ってきた。その成果については「英才児をさぐる」委員会に引き継がれ、今後成果がまとめられる予定である。また今年度からは「知能開発を目指した学習指導」という新テーマが設定され、研究を進めていく予定である。

2. 実践研究について

本校の実践している英才教育には、先行研究も学ぶべき先例もほとんどなく、したがって、独自に指針を定め基盤を作りつつ、進んでいく必要がある。そこで、各個人の実践研究も、一般的な実践研究とは区別して、テーマ設定を行い取り組んでいる。個々の実践研究については、研究紀要を作成し、公開研究発表会などで配布も行っている。実践研究の設定の指標は以下の通りである。

(1) 指導力を高める実践研究は、日々行われている教育実践の改善や問題の解決に役立つものでなければならないし、その成果が児童の学習や生活に貢献できることを目的とする。

(2) 研究対象は専門性や関心を生かしながら実践の中に定め、本校の教育方針や教科研究部の方針を踏まえ、教科の当面する課題を考慮して決定することとする。

(3) ４月末日までに教科研究部会において主題の報告を行い、その問題点の検討ののち決定する。合わせて研究方法上の見通しについても検討し、教師間において目標や手順についての共通理解を図る。

(4) 教科研究部においては研究プロジェクトとしての立場から協力し、実践研究がマンネリ化、独善に陥らないように相互評価しながら検討して、よりよい研究となるように創意工夫する。

(5) ７月末日までに教科研究部会において実践研究の中間報告をし、進行の状況を説明したり軌道を修正したりして検討を加える。

(6) 夏季研修において実践研究の中間およびまとめの報告をし、今後の実践に役立てるために各教科分科会等で相互に批判し共通理解を図る。評価の主な観点は、授業を通して児童の学力や行動がどのように変わっていったかに置く。

3. 校内の研修会につて

校内の研修会は春と夏の２回、児童の休みの期間に数日にわたって行っている。夏の研修会はこれまで宿泊して行ってきたが、昨年からは校内で行うことになった。また昨年は「リーダーインミー」を研修も合わせて行うなど、外部からの講師も招いて行っている。加えて中・高の教員との合同の研修会も行っている。

各自の実践研究については、夏の研修会で発表の機会を設け、成果を共有していけるようにしている。

４．校内の研究授業について

本校での授業研究の視点は独自のもので、教員の技量向上とは一線を画している。いわゆる一般的な授業研究とは設定自体が異なっており、本校では、**精神発達の最前線を捉え、子どもの創造的知能を刺激することのできる方向**で、授業研究のテーマを考え、研修を行っている。もちろん新人の教員の研修も一方で行われ、その中で技能向上を図っている。本校の授業研究の指標は以下の通りである。

(1) 授業研究の発表形式は、紙上発表やビデオ公開発表、公開授業の三つとする。内容は技術指導、研究発表、試行的研究、課題研究等について検討を行うこととする。

(2) 授業研究は、教材の解釈や児童理解、学習指導の技術、授業の展開などの研修であるため、その成果を日々の授業に役立てるように考慮する。

(3) 授業研究を通じて本校が当面する教育活動上の課題を具体的に明らかにしたり、児童の持つ特色を明らかにしたりして、教育の方法を探るようにする。また教育課程実施上の問題点を明らかにし、その改善のための資料を得るようにする。

(4) 教科研究部では、授業研究の基本的な方針にもとづいて作成された指導案を検討し、各教師の力を結集し指導案を作成する。検討する項目は、児童の実態把握・教材分析・授業の目標・指導案・学習環境・評価などとする。

(5) 教科研究部では、授業研究終了後、研究協議会で話し合われた結果をもとにして実施された授業を分析・検討し、その成果を総合的にまとめるようにする。

なお、授業研究として設定できるものは以下のものです。

〈その１〉　聖徳の特色ある授業に関するもの。

〈その２〉　英才児の反応等を対象とした授業設定や授業展開。

〈その３〉　二人指導制に関するもの。

〈その４〉　能力別クラスの実態とそれに対応した授業設定や授業展開。

〈その５〉　新人研修。

研究授業については全教員で授業の検討を行うものについては毎学期行うものとし、その他教科ごとにも新人研修をはじめ、必要に応じて行われている。また外部の研修会にも積極的に参加してもらい、その成果についても共有できるようにしている。

知能教育研究部の活動計画

本校では1969年（昭和44年）から小学校における知能教育の実践研究に取り組んでいる。「知能教育」というのは、文部科学省の学習指導要領の内容にもなく、むろん教科書もない。従って、教育内容（カリキュラム）から教材・教具まで全て独自に作り上げていかなければならない。

そこで、我が国の知能教育の先覚者伏見猛弥先生の指導を仰ぎ、アメリカのギルフォード教授の知能構造理論に基づき、実践を重ね、知能教育の基礎を築き上げてきた。現在は、2歳児から小学4年生までを対象にして、一貫した教育内容と方法で、'幅の広い思考力の育成'と'創造性豊かな人間性の育成'をめざした研究活動に取り組んでいる。

1．目標及び活動内容

(1) 知能因子の分析と教材開発

知能教育の教材・教具は全て手作りのため、週一回の定例の研究会では日々新たな教材開発を中心に行なっている。教材作成においては、次の点に留意して研究を深めている。

① 授業のねらい（知能因子）を十分に押さえる。

② 子どもの発達段階（興味・知識・思考）を十分に考慮する。

③ 単なる子どもの興味だけに流されないで、教育的価値を十分に考慮する。

④ 一人ひとりの子どもの能力に十分対応できるように（能力の限界への挑戦）、内容に幅をもたせ、発展性のあるものにする。

⑤ 学習の流れに変化をもたせるようにする。

⑥ 個別指導について十分に配慮する。

(2) 指導技術の向上

知能教育というのは、知識を教えるのではなく考える力を育てるわけであり、必然的に教科の学習指導法とは異なる点が多くなる。そこで毎時間の実践記録を基に、次の点をポイントにして授業研究を深め、指導技術の向上を図っている。

① 一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を行なう。

② 意欲・集中力を育てる。

③ 教えるのではなく、考えさせることに重点を置く。

④ 思考過程を大切にする。（「できた・できない」の結果だけにこだわらない。）

(3) 実践結果の分析と資料作り

2．今年度の活動の重点

(1) 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の充実。能力を更に伸ばす指導法の研究。

(2) 二人指導などの聖徳の特色を活かした指導方法の研究を深め、指導技術の充実を図る。

(3) 『聖徳式知能検査法』の実施結果を分析し、充実を図る。

(4) 授業での実践を通しての研究を継続的にまとめ、常に新しい教材開発。

国語科研究部の活動計画

1. 目　標

(1) 言葉に先行する精神発達の最前線における児童の成長の課題と児童を接触させることにより、その精神発達を促そうというのが私たちの基本的考え方である。

(2) そのためには、英才児に特有の思考・感情および意識の発達の実態を捉え、その基礎資料に基づいた教材の開発、授業方法の研究がなくてはならない。

2. 研究課題

成長の課題を授業として取り上げるためには、これに適した素材がなくてはならない。したがって，検定教科書をそのまま使用せず、幅広くさまざまな文章を集めて教材としている。私たちには成長課題の特定と教材の選定が何よりも重要なことである。

そこで、人間の意識活動を大きく、感情・思考・構えの三つに分け、これに用具言語を加えた四本の柱によって私たちの国語の学習領域は構成されている。

「用具言語」とは言語作業的な領域を含み、主に練習によって習得するものであり、言語作法・文法事項・漢字を含む語彙などである。

「感情」の領域とは，気持ちであるから喜怒哀楽をという捉え方ではなく，子どもたちの感情発達の階梯を見届ける姿勢をとっている。例えば、「ごんぎつね」はひとりぼっちを、「白いぼうし」は現実・非現実を考えるための材料となる。この場合授業は、ひとりぼっちという感情をめぐっての子どもたち一人ひとりの課題，・問題点を整理する場となる。

「思考」とは感情とともに人間の精神活動の重要な一部である。人間の思考路線を，児童の中に追究する姿勢をとり、一人ひとりの思考の内容・方法・段階に接近している。

「構え」とは、身構え・気構え・心構えなどという感覚構造を示す言葉で、母国語の習得を考えるとき、なくてはならない視点である。われわれは、生まれたときから人間らしい対象の定め方を習得しているが、その対象と人間の交わりにおける人間限定のあり方を構えと呼んでいる。

3. 今年度の重点目標

① 聖徳学園が目指す国語科教育の追究

「思考」「感情」「構え」の三領域と「言語事項」を教材の基本構造と捉え、子どもの成長課題に接近するといった点が本校独自の基本的な考え方であり、その考え方は常に発展するものと考えている。そこで、カリキュラム成立時の考え方に立ち戻るとともに、児童の成長発達という観点から新たな成長要因を追求し、それに見合った教材を積極的に見出していく。

② 教員の指導力量を高めるための研修

上記の通り、本校では、児童の精神発達という観点から領域が設定され、そのもとで教材を分析し、授業展開が考え出されている。また、同時に英才児ならではの発想の仕方をするといったことを考えたとき、教員の指導力量といったことが特に問われてくる。それに見合う研修を積むということである。

③ 卒業論文指導の充実

論文のテーマである「私と言葉」は、ことばを私という主体者との関わりで論ずること、つまり「私自身」「私と他者」「私と社会」「私と自然」「私と歴史」といった関わりについて、ことばを媒介にして見つめることにそのねらいがあり、だからこそ、子どもたち一人ひとりが自分と向き合えるようにすることが大切といえる。

書きながら考える、書くことによって考える、そうすることによってまだ明確にしていなかった問題点をつかんでいく、このような姿勢と能力を6年間かけて指導していくことになる。

数学科研究部の活動計画

1．目　標

(1) 数量・図形などに関する、基礎的な知識の習得や基礎的な概念・原理・技能の理解・習熟を図り、的確に活用して数学的な処理・考えを生み出す能力を養う。

(2) 数学的な用語や記号を用いることの意義について理解を深め、数量、図形の性質や関係を簡潔・明確に表現し、思考をする能力と態度を養う。

(3) 事象の考察に際して適切な見通しを持ち、論理的に思考する能力を伸ばすと共に、目的に応じて結果を検証し処理する態度を養う。

(4) 体系的に組み立てていく数学の考えを理解させ、その意義と方法を気付かせる。

2．指導方針

(1) 基本的な知識や技能が身に付くように指導していくと共に、知能開発のためにいろいろな角度から考えさせる。

(2) 教えることより、考えさせることに重点を置く。すなわち、原理や法則を教え込むのではなく、それを児童自身が導き出せるように助長していく。

(3) 問題解決学習や発見学習に重点を置く。

(4) 一人ひとりの能力の限界へ挑戦させることと、一人ひとりの能力と個性を啓発し、それに応じた指導を行うために、個別学習に重点を置く。

3．今年度の研究課題

(1) 各単元と知能因子の関係について探り、創造性を生かした授業を追究する。

(2) 基礎学力の充実及び能力の限界に挑戦させるべく、個々の児童に応じた指導と教材研究を行う。

(3) 知能開発と数学的思考力の養成に役立つ教材教具の開発と導入。

(4) 一人ひとりの子どもの個性と能力差に応じたきめ細かい指導を行うため二人指導制のあり方を考え充実を図る。

(5) 本校独自のカリキュラム・テキスト教材・指導方法の検討と熟成を図っていく。

(6) 毎月1回実践報告会を開き、各学年及びクラスごとの指導状況・反応・反省を出し合い、系統的な学習指導の徹底を図る。

(7) 各指導者が数学の指導に関する自主研究テーマを設定し、年間を通じてその研究に取り組む。また、その成果を互いに発表し検討を行うことにより、力量を高め合う。

(8) 授業研究の充実を図るために、校内授業研究や教科内での授業研究を行っていく。

(9) 聖徳の特色ある数学教育を明確にし、推進していく。

英語科研究部の活動計画

1．活動のねらい

(1) 前年度を振り返り、カリキュラムの精選・吟味を行う。

(2) 子どもの活動を中心とした授業、教材に留意する。

(3) 少人数での授業形態を活かし、一人ひとりの個性に合わせた指導に努める。

(4) 授業形態にあわせた「評価方法」に留意する。

(5) 異文化に触れる機会、教材の設定に留意する。

(6) コミュニケーション能力育成のため、スピーチ活動に重点を置く。

(7) 聞く、話す、読む、書く、の４技能を伸ばすカリキュラムを開発する。

(8) 外国人教員とともに指導内容・方法・評価について研究する。

2．方　法

毎週行われている教科会の中で検討していく。

各教員がお互いの授業を研究し、英語科での共通の課題を見つけ取り組んでいく。

また、外部の様々な研修会等に参加し研鑽を積む。

3．今年度の活動の重点

(1) 子どもたちの興味関心や発達段階に応じたカリキュラムになるよう、今まで実践してきたテーマや指導内容についてもう一度検討、吟味していく。

(2) 絵本を中心に、話の内容を楽しみながら、英語の単語や表現をできるだけ自然な形で身につけられるように指導していく。そのための絵本や教材の研究に力を入れていく。

(3) 教員から一方的な知識を与える講義式の授業に陥らないように、ゲームやその他様々な活動を通して子ども主体の授業になるよう心がける。

　また、小学生は音声面で優れているので、歌やナーサリーライム・ジャズチャンツなどを通し、この時期にしか身につけられない英語の音に慣れさせる。

(4) 高学年においては英検の内容に取り組むことで、英語の基本的な語彙力・表現力を伸ばしていく。同時に英語の自然な発音や英語の文字を読むことに慣れさせていく。

(5) 小学校での英語教育の評価方法を考えるとき、ペーパーテストだけでは測れないものが多々ある。面接試験を行うことで、子どものスピーキングやリスニングの力を知ることができる。その面接試験のあり方についてさらに研究、工夫する。また英語学習の集大成としてスピーチに取り組ませる。

(6) 現在のカリキュラムに基づいた授業だけでなく、定期的に世界のいろいろな国の人たちと接する機会を持てるような企画を立てる。また、英検などにチャレンジさせ、児童の英語学習の励みとなるようにする。

(7) 子どもたちが将来、自ら「未来を拓く」ことができるための英語力を身につけられるように、本校独自のカリキュラムを開発、実践していく。

理科教育研究部の活動計画

1．目　標

(1) 各クラスに応じた授業を工夫し、児童の能力の限界に挑戦させ、学力を保障する学習指導の推進を行う。

(2) 各学年の発達段階に応じた授業を工夫し2年生から6年生までの系統的な学習指導を目指す。

(3) 飼育活動や観察会・見学会などの企画を通して、児童の科学や自然に対する興味・関心の向上をはかる。

2．今年度の重点項目

(1) 英才児の知能を活かした授業の実践

英才児の創造的思考を生かし、発見へとつながる指導方法・内容を開発しその実践を積み重ねる。

(2) 五感を働かせる学習と ICT 化

小学生にとって、実際に手に取って調べる体験は科学認識の原体験として、必要不可欠なものと考えられる。一方、ICT 化は、蓄積した知識や実験結果等を蓄積・活用し、考察を進める上で大きな力を発揮するものと考えられる。それぞれの利点を生かした指導の在り様を探っていく。

(3) 自然観察会の充実

〈位置付け〉①自然と直接触れる場　②授業への興味付けの場　③授業の発展の場

今年度の主な活動内容（予定）は、以下の通り。

a. 植物の観察（3年生対象）　◇川原の草花の観察・スケッチ ……10月14日（2学期）

b. 動物の観察（5・6年生対象）　◇野鳥の生態の観察 ……井の頭公園掻い堀のため中止

c. 星の観望会（5・6年生対象）　◇月・惑星の観望 ……惑星・月の条件が合わず中止

d. 石の仲間集め（a と同時開催）　◇石の色・粒子などの違い ……10月14日（2学期）

e. 川の上流域の観察（4年生対象）◇川原の石の観察 ……5月13日（1学期）

(4) 特別授業の企画・実施

○ SSISS（Scientists Supporting Innovation of School Science）NPO法人科学技術振興のための教育改革支援計画の特別授業を実施 …… 特別研究理科対象

(5) 理科実験室内書庫の蔵書の充実

図書部と連携を図りながら、小学生向けに留まらず、専門性が高い書籍に触れる場として展開していきたい。

3．継続的に取り組んでいる項目

(1) 実験技能の向上と安全確保を目指した指導方法の開発。

(2) 施設を利用した校外授業の充実。

2年生『恐竜』◇国立科学博物館の見学 …… 9月14日（2学期）

5年生『星』◇プラネタリウムの見学 …… 12月（2学期）

(3) 飼育活動（水槽）栽培活動（花壇･温室等）に関する研究。温室を活用した学習活動の充実。

(4) 自然のたより　2年生対象の身近な自然の観察記録。週に一度、冊子にして配布。発展的に植物画コンクールへの出品を勧める。

地理科研究部の活動計画

1．目　標

① 「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。(2～4年)

② 人間関係を理解する上に於いて、自然環境を広い視野からとらえ、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成する。(4～5年)

2．指導方針

① 鳥かん図的視点を獲得し、空間の連続性を意識しながら、地図を豊かなイメージでとらえていく能力を養う。

② 地図・統計の取扱いについての知識・技能を獲得し、それらを使いこなせる能力と態度を養う。

③ 地図・統計の中から、目的に応じて適切な資料を選択し、信頼性・妥当性を検証した上で、判断の基準の中に組み入れていく能力と態度を養う。

④ 諸外国の文化に対する理解を深め、国際社会に於ける日本の役割を考え、国家および世界の一員としての自覚を深める態度を養う。

⑤ 日本の国土の保全及び地球規模での環境問題について考える態度を養う。

3．今年度の研究課題と教育活動

① 指導内容と教材の精選化

英才児の地図学習のあり方について、研究を深めていく。

5年生の産業の学習において、4年生までの学習をより有効に活用するための教材・授業形態を工夫していく。その際、日本と世界のつながりという点も重点の一つとしていく。

特別研究に関して、特に3学期の世界的な視野での問題解決のためのアプローチについて、さらに充実させていく。

② 学校行事と結びつけた効果的な学習の内容と方法の研究

林間学校・修学旅行などと、地図学習・自然地理・地誌学習との効果的な融合のさせ方について検討していく。また秋の校外授業については、4年生の上下水道、5年生の工場見学などを計画する。

③ 巡検（対象：5年生以上の希望者）の充実

身近な地域での地図の読図など、子ども達の主体的な取り組みを中心にして、毎年行っている。今年度は11月1日を予定している。

④ 作品および教材掲示の充実

スペースを最大限活用しながら、児童の作品や立体地図模型と説明文などを中心に、掲示が学習の意欲付けとなるよう心がける。

歴史科研究部の活動計画

歴史科では、4年生から3年間を通じて、歴史認識に必要なさまざまな思考力を育成することを目標としています。ただ単に知識を蓄積していくのではなく、頭の中に思い浮かべるイメージを大切にし、そこから展開される歴史叙述をもっとも重視します。

歴史学習の第1段階は、「想像力の育成」です。過去の出来事という追体験のできないことを、子ども達が思考や体験の中に持っているものの中から、イメージとして再構築することに授業の重点を置いています。具体的には、歴史学習の導入期として物語を通して楽しく達成できるように工夫しています（昔話・人物伝学習）。

次の段階として、「立場や視点を転換してとらえる思考の育成」に重点が置かれます。その時代の人間になったつもりでものを考え、歴史事象を異なった視点から対比する思考の働きです。

こういった指導は、現代的な発想や一面的な思いこみに偏らない柔軟な思考を可能にさせます。5年生での人物伝学習で、吉田松陰と井伊直弼といった対極的な立場にある人物を扱うのは、このような理由からです。

そして最終段階として、「自分なりの課題を見つけ、資料に基づいた論理的な思考」ができるようにめざしています。ここで言う「論理的思考」とは、物事の原因・結果・影響が相互に関連しながら流れていくことを認識させることです。

こういった思考を学習の中で表現するとき、概念があいまいなままに知識を並べていくのではなく、人間が主人公となって自分なりの仮説や歴史叙述ができるように、一人ひとりの特性にあった働きかけを大切に考えています。

[今年度の重点課題]

1．「学園のあゆみ」における授業深化をめざす

「建学の精神」を子ども達に伝える……私学においては大変重要な課題です。歴史の授業では、卒業を前に人物伝として「学園のあゆみ」を取り上げてきましたが、さらなる教材研究によって、各学年の段階を追った学習をめざしています。

2．課外学習の充実

毎年、土曜休みを利用したフィールドワークの特別授業を実施しています。今年に関しては、より広く家庭でもフィールド学習ができるように、「歴史・探訪ガイド」というような企画も考えていきたいと思います。

3．発表力の育成

グループで調べ学習を行い発表する、という旧来のものから一歩進めて、子どもなりに発表方法を工夫させ、歴史的な出来事を寸劇やコントで発表したり、テーマクイズにしたりという指導にも力を入れています。

4．世界文化遺産についての興味関心を深める

富岡製糸工場跡に続き、6年生が修学旅行で訪れている松下村塾が世界遺産になりました。これを機会に現在の候補地についても調べさせていきたいと考えています。

体育科研究部の活動計画

聖徳学園では、児童の発達に応じた指導を行い、子ども達一人ひとりの能力を最大限に発揮できるようにしています。そこで、体育科では、次のことについて指導の重点を置いています。

1・2年生については「遊び」を中心として、子ども達が体育に対して興味を示し、楽しく学習出きるような教材づくりに重点を置いて指導しています。また、3・4年生では「ゲーム」を中心としてルールを守りながら、集団スポーツの楽しさを教えていきます。5・6年生になると今まで学習してきた内容に更に技術的な内容を加えて、基礎を中心に指導しています。

この時期に技術的な内容を学習することで、高学年での発展へと結びついていきます。特に高学年になると授業での工夫が必要になり、『できるようになるためには』どうすればよいのか?などを子ども達が考えられるようにさせることが大切です。

○聖徳学園として独自性を出した体育科としてのカリキュラムづくり

子ども達の発達段階を十分把握して、教材の工夫などを中心に、子ども達の意欲づけになるような授業方法を目指しています。子どもにとって、わかりやすく、身につきやすい内容にしていきたいと思います。

体育科行事計画

聖徳の体育行事は以下の3つを行っています。

〈運動会〉10月上旬

毎年、幼稚園と小学校と合同で運動会を行っています。内容については、体育科で検討し、できるだけ新鮮な内容を目指しています。特に児童一人ひとりが活躍できるように役割を工夫して取り組みの場を多く持たせています。

〈マラソン大会〉10月下旬

マラソン大会に向けて、体育科では練習計画を設定し、実施しています。特に安全面に重点を置き、子ども達が粘り強く能力を発揮できることを心がけています。

〈スキー学校〉2月中旬

3～5年を対象にして、毎年、3泊4日間のスキー学校を開校しています。場所は長野県北志賀高原にある竜王スキー場で実施しています。自然の冬の厳しさや楽しさを感じながら、高学年は技術の向上、低学年は楽しさを学びながら、スキーに慣れさせていきます。子ども達の様子を見ていると、小学校時期に3回は行けることになり、かなり滑れるようになります。

〈その他〉

この他には、11月23日（祝）に東京都私立初等学校協会の私立小学校との交流として行われる体育発表会にも積極的に参加しています。

音楽科研究部の活動計画

聖徳学園では「一人ひとりの子どもの個性を育てる」、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」、「豊かな感性と自立心を育てる」の3つを教育目標として掲げています。音楽科ではこの目標のために、音楽への興味関心を持ち、高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする習慣と心の育成に努めています。また、音楽の基礎的な技術と表現力を発達段階に応じて育み、歌い奏でる楽しさを味わえるように留意しています。

日常の授業では主に、低学年は歌唱と鍵盤ハーモニカの演奏を、中学年は合唱とリコーダーの演奏を、高学年では合唱と合奏を中心に取り組んでいます。また、鑑賞や創作も全学年で取り入れており、鑑賞では想像力豊かに音楽を聴いて文章や発言として表現する活動を、創作では音楽的な理論を理解しながらリズムやメロディ等を作る内容を重視しています。

毎年11月に実施される聖徳祭では、外部会場の大ホールを貸し切り、クラス発表を主体とした合唱・合奏等の演奏を行なっています。練習・本番ともにクラス全体が気持ちを合わせ、ひとつのものを表現する喜びを味わう姿は、音楽を通した子どもたちの大きな成長が見られる瞬間でもあります。また、学年の演奏を鑑賞することで聴く力を養います。

「一人ひとりの個性」を尊重しながら集団でひとつの楽曲に取り組み、新しい音楽を創り上げるという活動は、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」ことにも結びつき、さらには「豊かな感性と自立心を育てる」ことへ繋がっていきます。心技体のバランスのとれた子どもの成長のために、現代において音楽という教科の持つ今日的意味・意義は、他の教科と同様に大変重要と考えています。

1．目標、及び活動内容

様々な音楽活動を通して刺激を与え、感性を育て、基礎的な能力がバランスよく身に付くよう工夫する。また、歌唱、器楽、鑑賞、創作の4領域が持つ多面性を授業の中で効果的に生かせるようにし、それが6年間を通じて体系的に作用するよう考慮する。

2．今年度の活動の重点

① 全学年の年間指導内容の精選、及び行事等での活用。
② 一斉指導における児童一人ひとりへの確かな技術指導、及び評価方法の研究。
③ 学校行事（公開研究発表会、聖徳祭等）における各学年、各クラスに適した選曲。
④ 外部講師を招いての特別授業の企画。（4年…リコーダー、5年…和楽器）
⑤ 東初協音楽部会主催音楽祭「さあ　はじめよう」への参加。（4年）
⑥ 希望者を対象としたコンサート鑑賞会の企画。
⑦ 音楽特別研究では研究や創作の活動を、器楽クラブでは行事での演奏活動をしていく。

美術科研究部の活動計画

1．目　的

(1) 各学年の発達段階に応じた課題やテーマを設定し、のびやかな感受性と豊かな創造力が獲得できるように教材を工夫していく。

(2) 個々の児童の個性が作品に反映し、より的確な表現で仕上げていけるように個別指導を確立していく。

2．今年度の重点項目

(1) 個性と能力に応じた、効果的な指導を工夫、開発していく。

(2) 美術に対して興味が湧くような教材及び指導方法を追究していく。

(3) 落ち着いた雰囲気の中で、児童が表現に取り組めるように、授業の展開を工夫していく。

(4) 仕上げた作品に対して、自己評価の時間を確保していく。

(5) 校内の作品展示に接することにより、児童の美術に対する関心や興味が向上し、鑑賞の能力が養われるようにする。

3．研究課題

(1) カリキュラムについて

絵画表現、彫刻表現、デザイン、工作の関連性とバランスの配慮及び一貫性を持たせたテーマの展開方法を開発していく。

(2) 各学年・クラスの実態に見合ったテーマや教材を開発していく。

(3) 学内展示の充実。児童の作品だけでなく、古今東西の美術作品も鑑賞ができるように展示方法を改善していく。

家庭科研究部の活動計画

小学校の家庭科においては、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけることや、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にする心情を育むこと、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と態度を育てることをねらいとしています。

本校では5・6年生の子ども達の発達段階と生活状況を踏まえ、一人一人の実態に留意しながら、様々な活動に取り組んでいます。その活動に取り組む中で、特に裁縫などの実習では子ども達一人一人の豊かな創造力を発揮できるよう、個々が工夫できる面を数多く作り、個々の創造性に沿った指導を心がけています。

1．目　標

(1) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知る。

(2) 家族の一員としての自覚を持った生活を実感する。

(3) 自分の成長を理解し、家庭生活を大切にする心情を育む。

2．今年度の活動方針および重点

(1) 一人一人の児童が意欲的に取り組み、自分の家庭生活をより充実したものにできる力を育てる。

(2) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知るために、出来る限り実技の時間を保障していく。

(3) 基本的な技術は指導するが、工夫できる面は大いに個々の考えを尊重していく。

(4) 『個』だけでなく、自分と共に生活する家族にも目を向け、『家族』という集団の大切さを意識させる。

研究発表会の歩み

研究発表会の歩み

□ **第 1 回（1969年）**

主　題：学校における英才教育

記念講演 「学校における英才教育」	英才教育研究所長	伏見猛彌
○研究発表 「国語教育について」	玉川大学教授	上原輝男
「数学教育について」	早稲田大学教授	岩崎　馨
「知能訓練について」	英才教育研究所	清水　驍

□ **第 2 回（1970年）**

主　題：学校における英才教育

○記念講演 「英才教育 5 年間の経過と問題点」	英才教育研究所長	伏見猛彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所指導部長	清水　驍
「英研式知能検査法について」	英才教育研究所員	千葉　晃

□ **第 3 回（1971年）**

主　題：学校における英才教育

○記念講演 「学校における英才教育の問題点」	英才教育研究所長	伏見猛彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所指導部長	清水　驍
「知能検査の問題点」	英才教育研究所員	千葉　晃

□ **第 4 回（1972年）**

主　題：小学校における知能教育

○記念講演 「小学生の知能とその教育」	英才教育研究所所長代行	清水　驍
○研究発表 「知能診断と教育評価の関連」	英才教育研究所研究部長	千葉　晃
○研究発表 「教科の教育と知能教育との接点」	本校教務主任	園田達彦
○研究発表 「知能教育のための教材」	本校教諭	小林五郎
	本校教諭	郡司英幸
	本校教諭	成田幸夫

□ **第 5 回（1973年）**

主　題：知能と学力

○記念講演 「本校における教育」	英才教育研究所所長代行	清水　驍

○研究発表 「知能と学力との接点(1)」 ― 知能指数と学業成績を中心にして ―

本校教務主任　園田達彦

「本校における漢字指導」　本校教諭　小林五郎

□ **第6回（1974年）**

主　題：英才教育の追究　― 6年間の実践と問題点 ―

○研究発表　― 各教科の実践をもとにして ―

「数学科教材に対する児童の取り組み方」

本校教務主任　園田達彦

「歴史教育の方法と実践」　本校教諭　大竹良造

「思考の教材をどのように扱うか」　〃　草野修三

「空気の重さを中心にして」　〃　成田幸夫

□ **第7回（1975年）**

主　題：英才教育の追究　― 知能と学力 ―

○記念講演 「現代学校と英才教育」　東京学芸大学名誉教授　大嶋三男　先生

○研究発表 「知能と学力との接点(2)」 ― 知能構造と学業成績を中心にして ―

本校主事　園田達彦

○分科会研究発表

国語科 「英才児に於ける感情発達の過程」　本校教諭　草野修三

数学科 「知能因子からみた教材構造」　〃　吉井昇

理　科 「理科工作教材を考える」　〃　成田幸夫

地理科 「地図と地球儀に対する児童の認識度」　〃　郡司英幸

□ **第8回（1976年）**

主　題：英才教育の追究　― 高知能児に応じた学習指導 ―

○記念講演 「日本教育の課題」　国立教育研究所長　平塚益徳　先生

○研究発表 「知能と行動」　本校校務主任　小林五郎

○分科会研究発表

国語科 「文章理解の方法」 ― 子どもの目に捉えられている場面映像はどのようなものか ―

本校教諭　葛西琢也

数学科 「数学における英才児の特性」　本校主事　園田達彦

理　科 「本校の子どもの理科に関する思考の特性」

本校教諭　成田幸夫

歴　史「本校歴史科の授業展開」── 因子別にみた知能の発達段階と
歴史科三段階の目標との関連 ──
本　校　教　諭　　大　竹　良　造

□ **第 9 回（1977年）**

主　題：英才教育の追究── 知能開発をめざした学習指導 ──

○記念講演「英才教育について」── 大脳生理学の立場から ──
東京教育大学名誉教授　　杉　靖三郎先生

○分科会研究発表

知能教育「知能教育の必要性」── 知能の発達過程を中心にして ──
本　校　主　事　　園　田　達　彦

国語科「知能と読みの接点」　　本校校務主任　　小　林　五　郎

数学科「数学における英才児の特性とその指導法」
本　校　教　諭　　吉　井　　昇

理　　科「科学的な思考方法と知能因子と学習課題との関連」
本　校　教　諭　　成　田　幸　夫

地理科「地理科における知能因子と学習課題との関連」
本校教務主任　　郡　司　英　幸

□ **第10回（1978年）**

主　題：英才教育の追究　── 知能開発をめざした学習指導(2) ──

○記念講演「学校教育の現状と課題」── 創造性豊かな子どもを育てるために ──
筑波大学教授　　村松　剛　先生

○分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」　　園　　長　　和　田　知　雄

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」── 意欲と集中力の育成と家庭の役割 ──
本　校　主　事　　園　田　達　彦

教科教育「知能開発（活用）をめざした学習指導」
本校校務主任　　小　林　五　郎

特別研究「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」
本校教務主任　　郡　司　英　幸

□ **第11回（1979年）**

主　題：英才教育の追究　── 知能開発をめざした学習指導(3) ──

○記念講演「生涯教育と学校」　　元文部大臣　　永井　道雄先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知 能 教 育「本園における知能教育」

教 科 教 育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教 科 教 育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第12回（1980年）**

主　題：英才教育の追究 ── 知能開発をめざした学習指導(4) ──

○記念講演 「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官　　渡辺富美雄先生

○研究発表 「卒業生の状況」── 追跡とその状況の分析 ──

本　校　主　事　　園　田　達　彦

□ **第13回（1981年）**

主　題：英才教育の追究 ── 知能開発をめざした学習指導(5) ──

○記念講演 「未来をみつめての教育」── 子どもの可能性を育てる教育 ──

武蔵野音楽大学教授　　大竹　武三先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知 能 教 育「本園における知能教育」

教 科 教 育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教 科 教 育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第14回（1983年）**

主　題：英才教育の追究 ── 英才教育15周年並びに校舎落成記念 ──

低学年：知能開発をめざした学習指導(6)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(1)

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

知 能 教 育「本園における知能教育」

国 語 教 育「本校における国語教育」

数 学 教 育「本校における数学教育」

理 科 教 育「本校における理科教育」

地理・歴史教育「本校における地理・歴史教育」

英語・体育教育「本校における英語・体育教育」

□ **第15回（1984年）**

主　題：英才教育の追究

低学年：知能開発をめざした学習指導(7)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(2)

○研究発表 「子どものものの見方・考え方」── 国語の授業を通して ──

本校校務主任　小林五郎

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第16回（1985年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(1)

低学年：知能開発をめざした学習指導(8)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

○研究発表「個性に応じた歴史学習」── イメージから論理的思考へ ──

歴史科主任　大竹良造

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第17回（1986年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(2)

低学年：知能開発をめざした学習指導(9)

高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(4)

○研究発表「知能開発をめざした学習指導」── 地理・数学の授業から ──

教務主任　郡司英幸

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」
低学年教育「知能開発をめざした学習指導」
高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」
中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ **第18回（1987年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：考える力を育てる保育(3)
低学年：知能開発をめざした学習指導(10)
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(5)

○園児・児童・生徒発表
① 歌と合奏　幼稚園年長組　指導者　鎌田禮子，松本阿佐子
② 英語劇　「The King's New Clothes（はだかの王様）」〈原作アンゼルセン〉
中学２年生　指導者　米屋清貴，佐藤久美子，伊神直彦
③ 歌　唱　「山の歌」（夏の山，山のこもりうた，山のスケッチ，フニクリフニクラ）
④ 児童劇　「ぼくたちの……ポチ」〈原作　梶本暁子〉
小学５年生　指導者　内藤茂，仁科建司

□ **第19回（1988年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導

○全体会
① 歌　唱　４年生・指導者：林谷英治
② 聖徳学園における英才教育

●英才教育の基本方針	本校主事	園田達彦
●知能教育	本校教務主任	郡司英幸
●能力に応じた指導	本校校務主任	小林五郎
●個性に応じた指導	歴史科主任	大竹良造

□ **第20回（1989年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 歌　唱　3，5年生・指導者：林谷英治，関戸道成

② 児童劇　4年生・指導者：板橋裕之

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」　小　松　賢　司　教諭

□ **第21回（1990年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年：知能開発をめざした学習指導

高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 研究発表「聖徳学園における英才教育」

●知能開発をめざした学習指導　葛　西　琢　也　教諭

●一人ひとりの能力や個性に応じた指導　大　竹　良　造　教諭

② 児童劇　3年生あずさ組「半日村」・指導者：松﨑昭彦教諭・山本友子教諭

③ 歌　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

□ **第22回（1991年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて

○全体会

① 講　演「聖徳学園の目指すもの」

── 幼稚園，小学校，中学校，高等学校の一貫教育について ──

幼稚園長
小学校長　和　田　知　雄

② 歌　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

③ 歌　唱　5年生・指導者：関戸道成教諭

□ **第23回（1992年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を助長する保育Ⅱ

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めてⅡ

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と，小学校の教育」

── 幼稚園，小学校の一貫教育について ──

幼稚園長
小学校長　園　田　達　彦

② 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任　内藤　茂

③ 歌　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

□ **第24回（1993年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて（Ⅰ）

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて（Ⅲ）

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「英才児の作文から，その個性を考える」

研究主任　葛西琢也

教務主任　草野修三

③ 歌　唱　5年生・指導者：関戸道成教諭

□ **第25回（1994年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて（Ⅱ）

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて（Ⅳ）

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「英才児は地図をどう描くか ── 子どもの空間認識と視点の転換 ──」

地理科主任　松﨑昭彦

③ 歌　唱　5年生・指導者：関戸道成教諭

□ **第26回（1995年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて（Ⅲ）

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて（Ⅴ）

○全体会

① 講　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践
— 自由研究・特別研究を中心に —」
特別研究科主任　大河内　浩　樹

③ 合　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

□ **第27回（1996年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：こどもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅳ）
小学校：英才児の創造性の開発と育成（1）

○全体会

① 合　唱　4年生・指導者：林谷英治教諭

② 講　　演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」
幼稚園長
小学校長　園田達彦

③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」
工作科主任　加賀光悦

□ **第29回（1997年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅵ）
小学校：創造的知能の開発と育成（2）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「創造性と学習 — 数字の実践から —」
数学科主任　松浦博和

□ **第30回（1998年）**

主　題：英才教育の追究
幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅶ）
小学校：創造的知能の開発と育成（3）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「卒業生のその後」　教務主任　草野修三

□ **第31回（1999年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（Ⅷ）

小学校：創造的知能の開発と育成（4）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「聖徳の英語教育」　英語科主任　藤石勝巳

□ **第32回（2000年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（IX）

小学校：創造的知能の開発と育成（5）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「歴史における概念形成のための想像力の育成」

歴史科副主任　板橋裕之

□ **第33回（2001年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて（X）

小学校：創造的知能の開発と育成（6）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「創造的知能の開発と育成 ── 知能訓練の実践から ── 」

知能訓練科主任　富永理香子

□ **第34回（2002年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（1）

小学校：創造的知能の開発と育成（7）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 研究発表「聖徳学園小学校の理科教育」

理科主任　三輪広明

□ **第35回（2003年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（2）

小学校：創造的知能の開発と育成（8）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長
小学校長　園田達彦

② 「創造的知能の開発と育成」── コンクール作品(作文)にみる聖徳児童の創造性 ──

国語科　内藤　茂

□ **第36回（2004年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（3）

小学校：創造的知能の開発と育成（9）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園　幼稚園・小学校の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

②「聖徳における二人指導制」── 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の追究 ──

教頭　加賀光悦

□ **第37回（2005年）**

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（4）

小学校：創造的知能の開発と育成（10）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

② 数学・個性的な解法 ── オープンエンドアプローチを通して ──

数学科主任　齊藤　勇

□ 第38回（2006年）

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（5）

小学校：創造的知能の開発と育成（11）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

② 学習発表「詩のボクシングの実践」── 英才児の個性・創造性育成の場として ──

6年生児童
国語科　渡辺泰介

□ 第39回（2007年）

主　題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（6）

小学校：創造的知能の開発と育成（12）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　園田達彦

② 創造的知能の開発と育成研究 ── 発明くふう展にみる聖徳児童の創造性 ──

研究主任　松浦博和

□ 第40回（2008年）

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（13）

個性と能力差に応じた複数指導（7）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　郡司英幸

② 知の冒険心を育む学校図書館

司書教諭　江橋真弓

□ **第41回（2009年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（14）

個性と能力差に応じた複数指導（８）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校･幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　郡司英幸

② 聖徳の理科教育について

理科主任　米持　勇

□ **第42回（2010年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（15）

個性と能力差に応じた複数指導（９）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校･幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 聖徳の修学旅行

～子ども達が成長する５泊６日～　地理科主任　松﨑昭彦

□ **第43回（2011年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（16）

個性と能力差に応じた複数指導（10）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校･幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 創造的知能の育成

～幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ～

知能訓練科　砂廣芳子

□ **第44回（2012年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（17）

個性と能力差に応じた複数指導（11）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 創造的知能の育成　～豊かな視点を育てる（数学・地理の授業実践から）～
（幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ）

数学科主任　細沼克吉

□ **第45回（2013年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（18）

個性と能力差に応じた複数指導（12）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 未来をひらく戦士を育てるために
～一年生の学級経営を中心に～　低学年主任　由里敏夫

□ **第46回（2014年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（19）

個性と能力差に応じた複数指導（13）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　加賀光悦

② 創造性を育むロボット教育
～特別研究数学の実践から～　教頭　和田知之

□ **第 47 回（2015 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（20）

個性と能力差に応じた複数指導（14）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　和田知之

② 研究発表　自分を知るために

～聖徳の国語から～　国語科　川口涼子

□ **第 48 回（2016 年）**

主　題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（21）

個性と能力差に応じた複数指導（15）

○全体会

① 講　　演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長
幼稚園長　和田知之

② 研究発表　聖徳学園における　児童会活動

児童会担当・学年主任・国語科主任　板橋裕之

研　究　同　人

（平成29年度）

〔理事長〕

岩崎治樹

〔聖徳幼稚園〕

園　　長　和田知之
教　　頭　松浦博和
主　　任　飯濵久美子
副　主　任　磯沼美紀
生活指導主任　荒井明子
年少担任　久保千春（知能あそび・体育あそび）
〃　園山恵理子（造形あそび・リトミックあそび）
〃　神山祐希（リトミックあそび・体育あそび）
〃　北村満利恵（知能あそび・造形あそび）
年中担任　水嶋知佳（造形あそび・リトミックあそび）
〃　飯濵久美子（造形あそび・リトミックあそび）
〃　高井正恵（リトミックあそび・造形あそび）
年長担任　荒井明子（リトミックあそび・造形あそび）
〃　永坂圭子（体育あそび・知能あそび）
〃　磯沼美紀（造形あそび・リトミックあそび）
専　　科
教　　諭　佐藤憲夫（体育あそび）
松浦博和（理科あそび）
講　　師
〃　藤原陽子（英語あそび）
〃　松浦雅美（知能あそび）
〃　大嶋比査子（知能あそび）
〃　伊奈恵理（知能あそび）
〃　上ノ宮純子（延長保育）
〃　大槻妙子（延長保育）
〃　小池順子（延長保育）
〃　小山玲子（延長保育）
〃　仲田恭子（延長保育）

〔聖徳学園小学校〕

校　　長　和田知之
教　　頭　松浦博和
教　　頭　齋藤　勇
教務主任　粕加屋直幸
研究主任　細沼克吉

生活指導主任　大河内　浩　樹
低学年主任　　米　持　　勇
高学年主任　　松　﨑　昭　彦

担　　任

あさぎり組（1年生）	米　持　　勇	（数学・理科）
〃	川　﨑　厚　志	（数学・美術）
しらさぎ組（1年生）	渡　辺　泰　介	（国語・英語）
〃	桂　田　　晶	（数学・知能訓練・体育・美術）
あ さ ま組（2年生）	細　沼　克　吉	（数学・地理）
〃	長谷川　和　暉	（国語・歴史・知能訓練・美術）
ほ く と組（2年生）	歌　田　翔　真	（数学・理科・ゲーム工作）
〃	土　田　隆　仁	（数学・ゲーム工作）
の ぞ み組（3年生）	古　賀　有　史	（英語・音楽）
は や て組（3年生）	田　中　飛　鳥	（国語・家庭）
3年学年担任	藤　石　勝　巳	（英語）
くろしお組（4年生）	三　輪　広　明	（理科・数学）
はやぶさ組（4年生）	明　石　この実	（国語・英語・家庭）
4年学年担任	内　藤　　茂	（国語・歴史）
はまかぜ組（5年生）	渡　邊　孝　典	（数学・地理）
わかしお組（5年生）	大河内　浩　樹	（理科・美術）
5年学年担任	谷　口　　優	（数学）
あ ず さ組（6年生）	松　﨑　昭　彦	（数学・地理・歴史）
や く も組（6年生）	川　口　涼　子	（国語・家庭）
6年学年担任	佐　藤　憲　夫	（体育）

専　　科

教　　諭	三　品　亜　美	（音楽）
〃	高　橋　まり子	（知能訓練・ゲーム・工作）
〃	豊　田　奈都代	（知能訓練）
〃	富　永　理香子	（知能訓練）
〃	地　挽　裕　子	（知能訓練）
〃	松　尾　由　香	（知能訓練）
〃	砂　廣　芳　子	（知能訓練）
〃	淺　利　絵　海	（知能訓練・ゲーム・工作）
〃	臼　田　愛　実	（知能訓練）
〃	長谷川　眞　子	（知能訓練）

司 書 教 諭　江　橋　真　弓

養護教諭	吉村厚子	(保健)
講師	申里敏夫	(国語・歴史)
〃	板橋裕之	(国語)
〃	藤原陽子	(英語)
〃	大嶋比査子	(知能訓練)
〃	内藤晴美	(知能訓練)
〃	ティア ヘイグット	(英語)
〃	須藤泰規	(美術)
〃	伊奈恵理	(知能訓練)
〃	三村望	(美術・ゲーム工作)
テスター	山田多津子	(知能検査)
〃	佐藤智子	(知能検査)
〃	粕加屋恵子	(知能訓練)
事務次長	萩原夏美	
事務	澁谷香耶	(庶務・経理)
〃	齊藤みどり	(庶務・経理)
環境美化	岩瀬勝彦	
〃	小池きみ江	

第 49 回　公開研究発表会要項

発　行　日　平成 29 年 6 月 17 日
編集企画委員　松　浦　博　和
飯　濵　久美子
豊　田　奈都代
発　行　者　和　田　知　之

発　行　所　聖　徳　学　園
東京都武蔵野市境南町 2-11-8
TEL（0422）31-3839
印　刷　所　株式会社　文　伸

©2017（700）